
鋼殻のレギオス【黒の秩序】

鉛のクワガタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼殻のレギオス【黒の秩序】

【Nコード】

N 6 4 7 2 W

【作者名】

鉛のクワガタ

【あらすじ】

犯罪発生率、汚染獣襲撃率共に高く必然的に武芸者のレベルが上がっていく、警法都市アレクタ。

そんな都市の武芸者と念威繰者の少年と少女は学園都市ツエル二に向かうことになる。

プロローグ（前書き）

半年ぶりの新規投稿です。

前の作品よりも面白くなるように頑張っていきます。

ブローグ

警法都市アレルタ。

その都市は犯罪発生率、汚染獣襲撃率が共に高く。

一般の都市警だけでなく数多くの武芸者が日夜、犯罪防止に事件の解決。

汚染獣襲撃に対しての警戒に力をいれている。

そのため必然と武芸者全体のレベルが上がっていき、並の犯罪者なら同じ武芸者同士でも武器を使わずに無傷で拘束できる程である。

そんなアレルタ都市警察の本部に二人の少年と少女の姿があった。

ともにアレルタ都市警察の制服に身を包んでいることから。都市警察の一員であることが判る。

「課長もいきなり呼び出したなんて……俺達何かしたか？」

「……わかんない」

「だよなあ。今日だって夜間警備で外縁部の見張りぐらいしかしてないしな」

そんな不毛な会話をしている二人の元に同じアレルタ都市警の

制服を着た一人の恰幅のいい男性がやって来た。

「いやあ、急な呼び出しですまん。お二人さん」

「こちらら夜勤明けでいい加減眠たいんです。要件なら早く仰ってください。マック課長」

「すまんすまん。ラグナはともかく、リリオくんに無理をさせる訳にもいかな。……うおっほん」

マック課長と呼ばれる男性は軽く咳払いをすると言葉を紡ぐ。

「お前達を呼び出した要件はな……」

「要件は？」

マック課長が一度言葉を切るので続きが気になったラグナと呼ばれた少年は続きを促す。

ラグナの促しにマック課長は幼子に御使いを頼むかのように軽く言った。

「お前ら、六年ぐらい学園都市ツエルニに行つてこい」

「……えっ？」

こうして、二人の武芸者と念威繰者は突如。学園都市ツエルニに向かうことが決まった。

プロローグ（後書き）

プロローグなので最初はこんな感じです。
次の投稿でオリ主二人の容姿についてだせるよう執筆します。

一話（前書き）

一話目なのに展開が急過ぎるかもしれません。

それでも、楽しんでいただければ幸いです。

鋼殻のレギオス【黒の秩序】

第一話をよろしくお願いします

一話

アレルタ都市警察本部ロビーにて三人の人物が会話をしている。

一人は短髪にした茶色の髪に身長は、190センチ程、平均よりも大きな体の持ち主で制服の下からでも鍛えられた身体の様子が伺える。

少年の名前はラグナ・エデュライネスという。

二人目は真っ黒な髪のを高い位置でポニーテールにしている。何よりもラグナより頭四つ分は小さくラグナと並ぶことでその差が大きく目立つ。

少女の名前はリリオ・クルールという。

そして三人目の人物はラグナとリリオの間に入ることと綺麗に小・中・大と並ぶことができる、恰幅のいい中年の男性で名前をマツク・デジナマルという。

そんな三人の関係はというと。

「改めて言うぞ？ リリオ・クルール警部にラグナ・エデュライネス警部補。 お前さん達には次の学園都市行きの放浪バスが到着しだい。学園都市ツエル二に向かってもらう」

「……ちよっ……ちよつと待って下さいよマツク課長!？」

「んん？ どうしたラグナ警部補」

どうした？ と言わんばかりのマツクと困惑気味のラグナ、リリ

才達は俗に言う上司と部下の関係である。

ちなみにこの警法都市アレルタではある程度の基礎知識と実力さえあれば十二歳から都市警察の仕事に携わることができる。

「いきなり学園都市に向かえって言われても。俺達には何が何だか分からないんですが？」

「……説明してもらえますか？」

今まで口を開かなかったリリオですら、状況の説明を求めている。

そんな二人の言葉にマックは、「……そうだな」っと至極真面目な表情になりラグナとリリオは息を飲んだ。

「ところでお前さんら同年代の友達っているか？」

「……はい？」

「………？」

「どうなんだ？」

いきなりのマックの質問にラグナとリリオは再び疑問を持つが二人はマックの言葉に気を取り直し質問に答える。

「ええっと、俺はリオぐらいですかね」

「……ラグ………だけかな？」

二人は年齢で言うと十六歳という若さだが、この交友関係の無さはマツクにとつても予想外だった。

「それが原因だよ。お二人さん」

「「????」」

マツクの言葉に再び疑問だらけになる二人にマツクは理由を言っていく。

「要するに、お前さんらの交友関係の無さに呆れた、ミリヤさんが少しでも若者らしいことをさせる為に、学園都市に入学させ。その枯れた心を潤してこいってことだ」

「枯れたって……」

「……失礼な」

マツクの余りの物言いに心に多少の傷を負ったラグナとリリオだった。

ちなみにミリヤとはラグナの実の母親であり、リリオの義理の母親でもある

『あとの話は家でミリヤさんに聞けよ。お前さんらは有休だけは十分に貯まってるし。上には俺から声かけとくから心配するな』

あの後、上司であるマツクにそう言われた二人は、渋々ながら帰宅することになった。

「なあ」

帰り道の途中、ラグナはリリオに声をかける。

「……………何？」

リリオは声をかけられたことで歩みを止め、黒い瞳をラグナに向ける。

「俺らってさ。何の為に都市警察に入ったんだっけ？」

「……………ラグは忘れたの？」

ラグナの言葉にリリオは寂しげに言葉を漏らした。

そんなリリオの表情をみたラグナは慌てて言う。

「ああ……………いや、すまない。俺が忘れたんじゃない。俺達が都市警に入って毎日。犯罪防止に、汚染獣襲撃警戒とかばっかつで親父達の手掛かりが見つからないからさ……………やっぱり焦ってんのかな」

「……………」

ラグナの言葉にリリオは黙り込みお互いに昔の出来事を思い出していた。

思い出すのは今から十年前の出来事。

ラグナとリリオが六歳の頃の記憶だった。

アレルタは何故か犯罪や汚染獣の襲撃が多く。数多くの武芸者や念威繰者達が治安維持の為、都市警に勤務していた。

エデュライネス家の父親。ラグナの父は武芸者で。クルール家の両親。

リリオの父は武芸者、母は念威繰者。つまり、ラグナやリリオの親も治安維持に駆り出されることが多く中々甘えることができなかった。

しかし、その年は珍しく犯罪の発生率も少なく、汚染獣の姿も見えないことから。普段、中々家に帰ってこない父親や両親が家に居る時間が多くなり。幼いラグナとリリオは喜び。父や母に甘える日々が暫く続いた。

そんなある日のこと、アレルタの進路先に廃都市が発見された。

アレルタの進路先にある都市は見たこともない都市で、汚染獣による被害かそれとも、セルニウム切れによる都市の放棄か原因解明の為、武芸者十五人、念威繰者五人の計二十人による調査隊が結成され。

調査隊の中にはラグナの父にリリオの両親が選ばれ、最初、二人の子供は嫌がっていたが帰りにプレゼントを準備してあげると言う態度が一変し、『早く帰って来てね』とエールを送った。

リリオはエデュライネス家に預けられることになった。

ラグナとリリオはラグナの母と共に三人の見送りに外縁部までやってきた。

外縁部には見たことのある人や見知らぬ人が沢山おり、人見知りの激しいリリオはラグナの母の背中に隠れるとそのまま、両親を探しはじめた。

案の定リリオの両親はすぐに見つかった。

『お母さん、お父さん！！』

リリオは両親を見つけるとすぐさま駆け出しそのまま二人に抱きつく。

そんなリリオを見ていたラグナはいつの間にか背後に立っていた父親に抱えあげられた。

父はラグナを自分の正面に向けると笑顔で言った。

『俺とリリオちゃんの両親が居ない間。母さんとリリオちゃんを守ってやれよ』

そんな父の言葉にラグナも笑顔で答える。

『あたりまえだよ！！ お父さんとリラおばさんとリゲルおじさんのかわりにお母さんとリリオはぼくが守るよ！！』

『よく言った！！ 流石は俺の息子だ。それじゃあ母さん。俺が居ない間ラグナ達の世話を任せるよ』

『はい、家と子供達は任せてください。』

『ありがとう、母さん。リリオちゃんもラグナと仲良くしてやってくれよ』

『……………うん』

リリオはラグナの父の言葉に顔を赤らめ恥ずかしそうに頷いた。

ラグナの両親が話しているなか、リリオの母がラグナに近寄り屈んで目線を合わせると華のような笑顔見せ口を開いた。

『ラグナくん、家のリリオをよろしくね』

『わかってるよ。リラおばさん。リゲルおじさんもしんぱいしないでね。リリオはぼくが守るから』

『ああ、期待してるよ。
小さな騎士さん』

其々で会話をしていると、あっという間に出発の時間になり、三人とも都市外探索用のランドローラーに乗り込み、そのまま廃都市向かっていった。

このとき。ラグナとリリオは此が最後の会話になるとは思いつかなかった。

「あれから一週間たっても親父やリラ叔母さん達が戻って来なくて

後の調査隊が廃都市に向かったら。皆が乗っていたランドローラーと錬金鋼だけが残ってた。ただ何だよ」

ラグナの言葉にリリオが続く。

「…………… ヒントは現場に残ってた、狼のお面の欠片と鋸状の剣型錬金鋼一本だけ」

「んで、それから俺とリオは、師匠に弟子入りして。ミツチリ鍛えて、都市警に入って。様々な事件の資料を調べ、近い事件の犯人に接触しても進展なし」

そう言うと、ラグナは一度大きく息を吐いた。

「都市警に俺達が入隊して早四年、確かに母さんには心配ばかりかけてたな」

「…………… そうだね。私も…………… あれからミリヤ叔母さんにはお世話になってばかりだもん」

第一次調査隊の行方不明事件はアレルタに瞬く間に広まり、関係者が何度も廃都市に調査探索に向かったが、隊員の錬金鋼と狼の面の欠片、鋸状の剣型錬金鋼しか見つからずこれ以上の調査は無意味と上は判断し調査は切り上げとなったのだ。

これにラグナ、リリオ、ラグナの母ミリヤはショックを受け、誰も口を開こうとしなかった。

ミリヤは最初の一週間は部屋に籠り、子供達とも顔を会わせようとしなかった。

そして、リリオは魂の抜けた脱け殻の様になり、夜になるとベッドの中で咽び泣いていた。

このとき、ラグナ無理に空元氣を出しリリオに「元氣をだせ。まだぼくと母さんが側に居るから」と慰めるがリリオは「ラグナにはまだお母さんがいるからそんなことが言えるんだ!!」

といままで一度も見なかったことのない剣幕でラグナを怒鳴りつけたのだ。

このことでラグナとリリオは大喧嘩をし、二人の怒声は近所にまで響き渡たるものだった。

このように、精神的に不安定になった三人の生活は酷いものだった。

そんな精神状態のなか一番に立ち直ったのはミリヤであつた。

夫と親友とも呼べる二人を失っても、氣丈に振る舞い、子供達に元氣をだせと、あなた達のお父さん達は絶対に生きて帰ってくると励まし続けたのだ。

「……あのときのミリヤ叔母さんは凄かったよね」

「……俺達は子供だったとは言え。大切な人が居なくなつたのを認めれなかったもんね」

ラグナとリリオはあのときのミリヤの傷を忘れることができなかった。

目を真つ赤に充血させ、その顔と二人を抱き締めていた腕と手首には大小様々な傷が付いており、小さい子供だったラグナとリリオは

この人は死ぬつもりだったんだと気付いてしまい。

最後の繋がりが途切れてしまうことを恐ろしく感じ、二人は大泣きしながらミリヤに謝り続けた。

数年後、母から聞いた話では、自分は最初の日、部屋で泣き明かし、次の日から己の体を傷付け始めたと言う。ラグナとリリオが大喧嘩を始めるその日まで何度も何度も子供達を置いて死のうと体を傷付けたと言う。

しかし、ある日ラグナとリリオの怒鳴り声が家に響いたとき、ミリヤは自分の心臓をわしづかみされた気分になったと言う。

何でもラグナの『まだぼくとお母さんが側にいる』と言う言葉に。

最後に夫と交わした言葉、『それじゃあ、母さん。俺が居ない間。ラグナ達の世話を頼んだよ』という夫の言葉を思いだし。

リリオの『ラグナにはまだお母さんがいるからそんなことが言えるんだ』と言う言葉に。

親友であるリラから託されたリリオという一人の女の子を支えなければという気持ちが芽生えたと言っていた。

「……あるとき。もしもミリヤ叔母さんが自殺してたら今の私達はなかったんだよね」

「……そうだな」

「……そんなミリヤ叔母さんにまた心配掛けてまで、都市警に入隊して。お母さん達の手掛かりばかり探しててたんだよね」

「……」

ラグナはリリオの言葉に黙るしかなかった。

「……だからさ」

リリオは一度、ラグナの側を追い抜くと笑顔で振り返った。

「私は今回のミリヤ叔母さんとマック課長の話を受けようと思ってるの」

「……」

ラグナは未だに黙ったままだがリリオは気にせず言葉を続ける。

「確かに……手掛かりを探すのも大事だけど。ミリヤ叔母さんにこれ以上心配を掛けたくないの。ラグはやっぱり学園都市に行くのは嫌？」

リリオの問にラグナはゆっくりとだが口を開く。

「……俺は、母さんやリオの為にいままで都市警の仕事をやってきた」

「……うん。知ってる」

リリオの言葉にラグナは言葉を紡いでいく。

「これは、最後に親父と約束した。『母さんとリオを守る』ってや

つの延長戦だと思ったよ。守るといつても身体だけじゃない、心も守ってやれっことで、少しでも母さんとリオを安心させたくて俺が好きでやってきたことなんだ」

「私も念威で手伝うって言ったとき、ラグは猛反対だったよね」

「ハハっ、そりゃそうだ。母さんとリオを守る約束だったのに。その守ってやる相手の力を借りなきゃいけないんだからな」

昔、母やリオに内緒で無理矢理弟子入りした師匠の元で修行をしていたとき。念威で追跡したリオはラグナの後を追いつ修行場に来て。

『私にも！！　念威と戦い方について教えて下さい！！』

と怒鳴り込んできたのである。

「あのときは驚いたもんなあ。まさか運動音痴のリオが念威だけじゃなくて——戦い方を教えて下さい！！　だからな」

ラグナは修行時代のことを思い出したのか、ククツと笑いを溢した。そんなラグナの反応にリオは眉をひそめる。

「だって、悔しかったんだもん。念威なら探し物とかで役にたてるのにラグは『リオは戦えないから駄目だ』って言うから。ムキになって念威で跡をつけたんだから」

「そうだったな。あのときは、また母さんに心配を掛けたもんな」

「私だつて、ビックリしたもん。ラグが夜遅くに帰ってきたと思つたら。顔に青アザたくさん作ってくるし、ミリヤ叔母さんが何を聞いても……『公園で転んだ』って嘘ばかり吐くし、私には『戦えないから駄目だ』だもんね」

「そりゃ、念威で跡をつけるわけか」

「そうだよ」

リリオと帰り道を歩くなかラグは突然歩みを止めエアフィルターに覆われた空を見上げた。

「よし!」

「どうしたのラグ?」

「いや、俺も話を受けることにしただけだよ」

「えっ! どうしたのそんな急に?」

いままでの会話で母にどれだけ心配を掛けさせてきたことが、確かに父達の手掛かりを得ることも喜びを与えるかもしれない。

だが、もしこの場に父が居たらと思うと絶対に殴られているに違いない。

(親父にリラ叔母さん、リゲル叔父さん。手掛かりを探すのが遅れるけどごめん、今だけは母さんの話を聞くことにするよ)

ラグナはリリオに背を向けるとその場に屈み込み、リリオに言う。

「リオ、背中に乗れ。急いで家に帰って母さんに話を聞くぞ」

ラグナの行動と言っている言葉の意味を瞬時に理解したリオは。

「うん、わかったよ。ラグ」

ラグナが最後にみた。リオの母親、リラにそっくりな笑顔をラグナに向けた。

リオはラグナの大きな背中に飛び乗り。

そのまましっかりと抱きつき。

「いつでも！」

と、背中に乗ったことラグナに伝える。

「振り落とされんなよ！」

背中にリオの体温を感じたラグナは、全身に剄を流し脚に力をこめる。

すると、リオを乗せたラグナの体は大きく跳躍し、二人はその場から姿を消した。

目的地はラグナ達が住む家。

エデュライネス家、そこに待つであろつ。

二人に残された大切な家族。

己を傷つけながらも子供達を励まし続けた。心より尊敬する二人の母親。

ミリヤ・エデュライネスの元へ。

リリオ・クルールを背中に乗せたラグナ・エデュライネスは彼女に負担を掛けないよう、警法都市アレルタを駆け抜けていく。

一話（後書き）

……プロットがあるはずなのに全然違う展開になってしまった。

【黒の秩序】第一話を読んでくれた方々ありがとうございます。

私の低レベルな文章を少しでも上げるため。

感想、コメントなどをお待ちしております。

ただ……悪質な書き込みやヤジだけはご勘弁ねがいます。

それでは、また次回を楽しみにしてください。

二話（前書き）

今話もなぜかプロットから大きく逸脱し滅茶苦茶急な展開＋謎（？）のオリキャラの出現になってしまいました。

今回も前回、同様少しでも楽しんでいただければ幸いです。

それでは、鋼殻のレギオス【黒の秩序】第二話をよろしく願います。

二話

警法都市アレルタ。

エデュライネス家、キッチン。

夜勤明けで帰ってくるであろう子供達の為に食事を作るミリヤの元に青白く発光する菱形の念威端子が近づき。

『お仕事中失礼いたします。ミリヤ様』

菱形の念威端子からは、落ちついた少女の音声が発せられる。

「あら、念威繰者の方が何の用かしら？」

ミリヤは突然の念威端子に、これといって驚くこともなく、野菜を刻んでいた包丁の手を止めると、ギガちゃんがプリントされたエプロンで手を拭きながら、念威端子の主に要件を聞く。

——ちなみにギガちゃんとはアレルタで放送される人気音楽番組のマスコットキャラで緑色の球体につぶらな瞳、天使の羽と輪が付いた不思議生物である——

『私はマック・デジナル課長の使いの者で、名をクレア・ノイマンと申します』

「あら」

念威端子の主であるクレアが自分の善き相談相手である人物の部下

だとわかると、ミリヤは申し訳なさそうに言う。

「マックさんの部下の方でしたか。これは失礼しました。いつもいつも家の子供達がお世話になっております」

ミリヤは念威端子に向かつて頭を下げ、子供達の仕事仲間であろう念威繰者、クレアに対し礼を言う。

その言葉にクレアは。

『っ……いえ、むしろ。此方がお二人に世話されるぐらいなので。ミリヤ様は頭をお上げ下さい』

念威端子越しに、クレアの少々戸惑った雰囲気が伝わってきたのかミリヤは「そうですか」と返事をし改めてクレアに聞く。

……実のところ。ミリヤには念威繰者の要件はわかっている。

何せ。自分がマックに頼んでいたことなのだから。

「マックさんが、わざわざ念威繰者であるクレアさんを使ってまで、連絡をくれたってことは。あの子達に話を伝えてくれたんですね？」

ミリヤの言葉にクレアはというと。

『私には何のことか判りませんが、課長は『例の件。しっかり伝えときました』と言えば理解すると仰っていました』

私は、まったく興味がありませんと言わんばかりにいい。

マックからの伝言をミリヤに伝える。

「……そうですか、クレアさん。お忙しいなか、態々ありがとうございます」

『……いえ、こちらこそ。食事の支度中に失礼しました。課長の伝言も確かに伝えたので私はこれで失礼します。』

「本当にありがとうございましたクレアさん。マックさんにも『助かりました』と伝えといて下さい」

『……わかりました。課長にはしっかり伝えますので。それでは』
するとミリヤの側に浮いていた菱形の念威端子は静かに外に出ていった。

念威端子が出ていくのを見届けると、ミリヤは一人微笑み。

「ふふつ。あの子達ビックリしたでしょうね。どんな顔をしたか見て見たかったわね」

と、のんきなことを言いつつキッチンに備え付けてあるギガちゃん時計を確認すると何時、二人が帰ってきてもおかしくない時間になっていた。

「あら？ もうこんな時間。急いでご飯の支度しないと。あの子達夜勤明けだし、きつと走って帰ってくるから何時もよりお腹すかしてるでしょうね」

我が家に帰ってくるであろう子供達の食事を作るミリヤであった。

『課長、頼まれた連絡事項全て伝え終わりました』

アレルタ都市警察本部。

未解決事件資料保管室。

そこで一人調べものをしていたマツクの元にクレアの菱形の念威端子が近づき。マツクが頼んでいた、防犯対策会議の連絡事項を伝え終わったと連絡がはいる。

それにマツクは。

「おう、ご苦労さん。それならもう帰っていいぞ。後の仕事は俺がするから」

劳いの言葉をクレアにかけるマツクだが、ふと思い出したかのようにクレアに聞く。

「ああ……そういや、お前さんに頼んでおいたお使いはできたか？」

そんなマツクの言葉にクレアは。

『はい、課長が仰った伝言はミリヤ様にお伝えしました』

「……ならいい。ありがとうよ」

『それと、ミリヤ様からも伝言を預かっております。』

「ミリヤさんからの伝言？　何て言ってた？」

クレアの口から出てきたミリヤの伝言とやらのマックは先を促す。

それにクレアは。

『伝言は『助かりました』とのことです。私には何のことか分かり兼ねますが確かにお伝えしました』

「……ああ、ありがとよ」

マックは静かに礼を述べると再び資料に目を通しはじめる。

『……』

報告を終えたのに資料室から消えない念威端子はいまだマックの側に浮いている。

そんな部下の念威端子に向かってマックは。

「……まだ。何かあるのか？」

と、資料に目を通したまま声をかける。

『いいえ。なんでもありません。それでは課長、お先に失礼します』

念威端子はそのままクレアの元へと戻っていった。

マックは一度ため息をつく、資料室に唯一。一つだけある窓より

空を眺め、呟いた。

「後は、あいつらとミリヤさんの問題だな」

マックは手元にある資料のバインダーを閉じるとそのまま元あった棚にしまい資料室をあとにした。

マックが未解決事件資料保管室を退出し十分もしない内に一人の少女が入室する。

その少女は先程までマックが居た位置まで迷うことなく移動し。

マックが閲覧していたであろうバインダーを躊躇なく手に取り表紙のタイトルを確認する。

バインダーのタイトルにはこう書かれている。

『廃都調査隊行方不明事件調査記録』と。

(……これが、あのお二人が密かに追っている事件)

少女は心の中で呟くと資料を確認するため、バインダーを開き。一枚一枚資料を読んでいく。

その少女の傍らには、先程までマックの元に連絡に来ていた。菱形の念威端子が青白く発光しながら回転している。

人気のない未解決事件資料保管室にはバインダーのページを捲る音

が響くだけだった。

ミリヤ・エデュライネスは食事の支度を済ませると、居間のソファ―に座り。静かにラグナとリリオの帰りを待っていた。

「これで、あの子達が少しでも年相応に過ごせるようになればいいんだけど……」

ミリヤはその手に学園都市ツエル二の入学案内を持ち、呟く。

脳裏に浮かぶのは、まだ幼稚園を卒園したばかりの息子が全身、土埃にまみれ。体のいたる所に青アザを大量に作ってきた姿だった。

あの頃のラグナは、顔にアザを作って帰宅し、その姿に心配したミリヤは息子に何があったか話を聞こうとするも『公園で転んだ』の一点張りで一緒に心配した親友の娘であるリリオに対しては『戦えないから、駄目だ』と言う始末でミリヤには何がなんだか判らなかった。

そんなある日。夕飯の支度をしていると、真剣な表情をしたラグナとリリオに『大事な話がある』と居間に呼ばれ、驚くことを言われた。

それは。

『……ミリヤ叔母さんは。……お母さん達は絶対どこかで生きてるって言った』

リリオが静かだがゆっくりと言葉を繋いでいき。

それにラグナが力強く、途中、泣きそうになるが宣言する。

『僕とリリオが都市警察隊員になって絶対に見つけるよ！！　それで……それで……　また前みたいに皆で楽しく生活するんだ！！』

まだ、六歳になったばかりの子供が……　普通。親に泣きつき、日々を友達と遊んで過ごす幼子が、行方不明になった家族を探しだし、前のような生活を取り戻すと宣言したのだ。

ラグナとリリオの宣言にミリヤは目頭が熱くなり泣きそうになるが、動揺を悟られないよう。無理矢理笑顔を作り、笑いかけ子供達に言った。

『ありがとう。ラグナにリリオ。　お母さんも二人の為に頑張るからね』

その言葉に子供達は力強く『うん！！』と返事をした。

後日。ラグナとリリオから師匠と名乗る自分よりも年若い女性を紹介されミリヤはたいそう慌てのは懐かしい記憶である。

当時のことを思い出し。大きくため息をつく。

「……あ那时的私はきつと、どうにかしていたのよ」

（なぜ。私は、あんなに小さかった子供達を危険な道に歩ませることを後押ししてしまったのだ）

確かにラグナは子供だが都市に必要な武芸者であった、将来は汚染獣討伐や都市間の戦争、臨時出勤枠で危険な目あつたろう。

リリオは武芸者ではなくサポート役の念威繰者。武芸者程ではないが危険な仕事に参加するのに変わりないだろう。

しかし。あの子の二人はまだ六歳だ。

あの、誓いの宣言から二人は武芸に念威。都市警察の勉強を熱心はじめ、同年代の子供達と過ごすことを止めた。

そして無茶をするようになってしまった。

毎日、生傷は絶えず。第三者の視点から見れば虐待を受けていると勘違いされる程であつた。

それから六年後。二人は難関と呼ばれる、十二歳からの都市警察採用試験に受かり、これまで以上に無茶をするようになってしまった。

余談だが、ミリヤはこのとき、二人の上司であるマックに出会い二人について相談するようになったのだ。

アレルタは他の都市と比べると犯罪発生率や汚染獣の襲撃率も高いので、いつか二人が怪我を負い、

死んでしまふんじゃないかと毎日心配したが、ミリヤのには、二人が帰ってくるであろう家で毎日の食事を準備したり世話を焼くぐらいしか出来なかった。

そして、心のどこか。二人があの人達の手掛かりを掴んでくれるの

ではないかと期待もしていた。

ミリヤはそんな自分に自己嫌悪を起こしたことは一回や二回ではなかった。

「……ごめんなさい、あなた。今更遅いかもしれないけど。いまからでも、あの子達に楽しい思い出を……作って欲しいの」

ミリヤはいまにも泣き出しそうな顔をし、手に持った入学案内のパンフレットを思わずシワだらけにする程力を入れてしまっていた。

『母さん。ただいまー』

『ミリヤ叔母さん、いま戻りました』

丁度そのとき、玄関のほうから愛しい子供達の声が聞こえてきた。

ミリヤは二人が帰ってきたことに気づくと、今の自分の顔を見られるわけにはいかないと、すぐに笑顔に切り替え、急いで玄関に向かい。

「お帰りなさい。ラグナ、リリオ」

温かく二人を出迎えた。

マックから聞いた要件の詳しいことを母に聞くため。

背中にリリオを乗せたラグナはアレルタの街並みを駆け抜け、十分

もしない内に自宅前にたどり着いた。

「リオ、家に着いたぞ」

「ご苦労様。ありがとね、ラグ」

リオはラグナに礼の声をかけつつ、背中から飛び降りる。

リオが背中から降りたのを確認するとラグナはそのまま、入口のドアノブに手をかけ、ゆっくりと扉を開いた。

「母さん、ただいまー」

「ミリヤ叔母さん、いま戻りました」

玄関にラグナとリオの言葉が響くと、居間がある部屋から、ラグナの母であるリオオの保護責任者でもあるミリヤが笑顔で二人を出迎えた。

「お帰りなさい。ラグナ、リオ」

二人を出迎えたミリヤにラグナは早速、マック課長に聞いた話を切り出した。

「……母さん、学園都市の話なんだけど」

玄関の空気が一瞬だが重くなる。

「……さあ、早く入りなさい。二人とも夜勤明けでお腹が空いたでしょう？ ご飯。たくさん作ってあるわよ。ラグナその話はご飯の

あとでね？ リリオも構わないわね」

「……………あつ、はい。わかりました」

「……………わかったよ。母さん」

ラグナの言葉にミリヤは話は食事を済ませてからだと伝え。

リリオはミリヤが放つ雰囲気には黙然とし、ラグナは渋々納得した。

このとき。ミリヤはどうやってこの二人を説得しようかと考えはじめる。

しかし、すでに二人の中で答えが出ていることを、ミリヤはまだ知らない。

エデュライネス家の食卓は静かだ。

既に食卓を終えたラグナとリリオは、現在食後の珈琲の準備をしている、ミリヤの着席を待っている。

二人はミリヤ本人の口から聞かないといけない———どうして、マツク課長に学園都市に行けと伝言を伝えたのか。

マツク課長が言っていた交友関係も一つの理由だろう。

しかし、それだけで学園都市に行けというだろうか？

交友関係なら、この都市にいただけでも解決する問題だ。

なのに、ミリヤはマックに頼んでまで、二人を学園都市に行かせようと考えている。

二人は意を決して、珈琲をカップに注ぐミリヤに言う。

「母さん。さっきの話の続きなんだけど」

ラグナの言葉に珈琲を注いでいたミリヤの動きが一瞬止まる。

「ミリヤ叔母さんが、マック課長に伝言を頼んで、学園都市に向かうように言っただけでしょ。どうして伝言なんて面倒な方法を？」

ラグナに続き、リリオもミリヤに問いかけるとミリヤは珈琲の入ったカップを二つ並べ。

そのまま、二人に向かい合うよう椅子に座り自分の分の珈琲を一口飲むと口を開いた。

「マックさんから聞いたでしょ？　あなた達の交友関係が少し心配だね。ただ私が直接伝えるのも気まづくなっちゃって。お願いしたのよ」

ごめんなさいね。とミリヤは苦笑いし、そのまま話を続ける。

「お仕事なら、本来まだ学生の身分であるはずのあなた達なら大丈夫だってマックさんも言ってたし……」

「……ミリヤ叔母さん」

ミリヤが続きを話そうとするがリリオが口を挟む。

「どうしたの？　リリオ、何か言いたいことがあるの」

そんなミリヤにリリオはもう余計な詮索をせず。自分の答えを言うことにした。

「私は叔母さんの話を受けるつもりです」

「……えっ？」

「もちろん、俺も受けるぜ」

「えっ……えっ？　どういうこと？」

リリオの言葉に続くようにラグナも言う。

これにミリヤは困惑する。

二人は絶対に学園都市には行かないと言っていたからだ。

これでは二人を説得する方法を考えていた自分がマヌケに思える。

ミリヤは自分を落ちつかせる。

落ちついたのを確認し席を立ちツエル二の入学案内を棚から二つ取りだし席に戻る。

「……二人ともこれを」

「ミリヤ叔母さん？」

「これは？」

「学園都市ツエル二の入学案内よ。でもよかったわ。二人がまさかこんな簡単に決めてくれるなんて」

本当によかった。

「六年間ぐらい一人でも大丈夫だから。二人は心配しないで沢山友達を作ってください」

これで二人にも、ようやく子供らしい生活を送ってもらえる。

「あなたが帰ってきたら、あつちでの思い出を聞かせてもらえればいいから……ね？」

少しでも、あの事件のことを忘れてもらえるとうれしい。

今のミリヤにはそんな思いがこだましていた。

「……母さん」

「……ミリヤ叔母さん」

二人の心配そうな声が聞こえる。いったい何事かと思い二人の顔を見ようとすると何故か前が滲んでよく見えない。

「あれ？……なんで？　ラグナとリリオの顔がよく見えないわ」

顔を腕で拭うが、それでも前が見えない。

「あれ？ あれ？」

何度も何度も顔を拭うがまともに二人の顔が見えなかった。

原因はミリヤの瞳から溢れてくる涙だった。

それからしばらくの間ミリヤは涙を流し続けた。

二話（後書き）

今回も最後まで読んでくださった方々ありがとうございます。

m (——) m

今回はラグナ、リリオの保護者であるミリヤが中心になりました…

……が！

はいっ、文章や文法が滅茶苦茶でごめんなさい。

原作突入まで。まだかかりますが気長にお待ちいただければ幸いです。

未熟過ぎる著者のレベルアップのため、感想やコメントをお待ちしております。

例のごとく、悪質な書き込みやヤジだけはご勘弁を。

三話（前書き）

はい、今回は短いです。

ごめんなさい

m (——) m

【黒の秩序】三話目です。

今回は前回以上に急展開、台詞の矛盾があるかもしれませんが、楽しんでいただけたら幸いです。

三話

ラグナとリリオは困惑していた。

二人はミリヤに。

——学園都市への入学の話を受けると言った。

すると……ミリヤは緊張した表情から一変し、慌てた様子をみせるも、すぐに落ち着きを取り戻し、二人の前に学園都市への入学案内を差出し。

自分のことは心配するな、六年間楽しんでこいと、涙を流しながら言うのだ。

二人はミリヤの突然の涙に驚くも。

暫くの間。

ミリヤが涙を流し終えるまで静かに待つのだった。

「もう。大丈夫なのか母さん？」

「ええ。大丈夫よラグナ……リリオも驚かせてごめんなさい」

「無理しないで。ミリヤ叔母さん……」

ミリヤの突然の涙から早、五分。

ミリヤは瞼に付着していた涙を拭くと、ラグナとリリオに大丈夫だと告げる。

「……………」

ラグナとリリオは先程のミリヤの様子が気になり、ラグナは聞くことにした。

「……………母さん」

「なあに？ ラグナ」

「母さん……………本当は、俺とリオが都市警にいるのが気に食わなかったのか？」

「……………」

「そうなの？ ミリヤ叔母さん」

ラグナの問いにミリヤは無言になり、リリオは答えを待つ。

「……………そうね。今更だろうけど。二人が都市警に入るのは嫌だったわ」

「……………っ！」「」

ミリヤの返答にラグナとリリオは言葉詰まった。

「……あ那时的貴方達の約束の言葉は本当に嬉しかった」

ラグナとリリオはミリヤの言う、『あ那时的約束の言葉』に心当たりがある。

二人が母に誓った言葉。

約束は要約するところなる。

『絶対に皆を見つけ出す』

この言葉に、ミリヤはあ那时。笑顔で『ありがとう』と言ったのだ。

「……なんで。……なんでなのミリヤ叔母さん？」

「……リリオ」

リリオは動揺を表し、ラグナはそんなリリオを心配する。

すると。

「ごめんね。リリオ」

ミリヤがいつの間にかリリオの側に移動し、リリオの小さな抱き締めていた。

「あ那时的ラグナとリリオの約束は本当に、ほんとうに、嬉しかったわ」

ミリヤはリリオを優しくあやすように背中を叩きながら言葉を紡い

でゆく。

「……でも。あのときの貴方達はまだ六歳、本当だったら毎日学校に通って、勉強して、友達と遊んで、笑っているはずなのに……」

そこで、一度ミリヤの言葉が止まるが再び話し出す。

「……あなた達は、……毎日毎日、傷だらけになって。帰ってくる度に、『大丈夫、絶対に強くなって、皆の手がかりを見つけるんだ！』って言うってくれる」

「……あつ」

ミリヤはそこまで言うのと、リリオから離れ、自分の心臓のある部分を右手で掴み、言う。

「その言葉に、あなた達の表情に……私は胸が締め付けられて……自分を攻めたわ」

何故。子供達がこんなに苦勞をするのか。

何故。私はこの子達を止められないのか。

何故？ どうして？

「私はその度に思ったわ」

「『子供たちの人生を無駄にしてまで、昔の生活を欲しているんじゃないか』って……」

ミリヤの独白にラグナは珈琲で渴いた喉を潤わせた。

「……でも、それは俺達が言い出したことであって、母さんが気にやむことじゃ……」

「……ラグナならそう言うと思ったわ。……でもね。一人の母親としては最低なことなの。私は、一人の母として、あなた達に危険な道を歩ませ、時間を無駄にさせてしまった罪があるの……」

「……………」

『罪』

都市警察の一員として、四年間勤務してきたラグナとリリオには聞き慣れた言葉である。

しかし……ミリヤの言う罪は。一人の母としての罪。

我が子を選んだ道とはいえ、まだ当時六歳の子供を、危険を承知で後押しし。

子供らしいことをさせてやれなかったということ。

これは、ラグナとリリオにはまだ完全には理解できない親心を裏切ったと言つものである。

「……だからね。私は少しでも……あなた達に子供らしいことをさせたくて、学園都市に向かうよう、マックさんをお願いしたの」

「……母さんに心配をかけてるって……わかってたけどそこまで思

い詰めていたなんて」

「ごめんなさい……ミリヤ叔母さん」

ミリヤのいままでの思いを聞いた二人はその表情を曇らせ。ラグナは後悔の言葉をこぼし、リリオはミリヤに謝罪する。

そんな二人にミリヤは。

「いいのよ……二人とも。悪いのはあのとき、あなた達を止められなかった私が悪いんだから……ね？」

二人に罪はない、だから気にやむなと言う。

「……でも!」

「……まで。リリオ……母さんはまだ何か言うきだ」

リリオはそんなミリヤの言葉に抗議しようとするが、ラグナに止められ。

ミリヤは、まだ言葉を続ける。

「こんな言葉で、あなた達が納得するとは思ってないから、私から二人に罰を送りたいと思います」

「「……罰」」

ミリヤの言う罰の意味を二人は即座に理解する。

「あなた達は、学園都市に行つてそこで体験したこと、学んだこと、新しくできたお友達の話を中心に帰つてきたときに全て話すこと」

「……やっぱりな」

「ミリヤ叔母さんらしいね」

そして……と話は続く。

「あなた達二人に危険な道を歩ませてしまった、私は罰として六年間一人でこの家を守り抜きます。……さすがにこれは軽すぎかしら？」

苦笑いするミリヤにラグナとリリオは目を合わせ、ニヤツと笑つて口を開く。

「ミリヤ叔母さんにはあと一つ罰を受けてもらつよ」

リリオが笑顔で最初に切り出し、ラグナが続く。

「母さんに受けてもらつ罰は……」

「罰は……？」

そんな二人にミリヤは少し、心臓を高鳴らせながらも続きを促す。

一度深呼吸するとラグナが言う。

「俺と……」

リリオもそのあとに続き。

「私が……」

声を揃え。

「「帰ってきたら――！」」

母にかすであろつ罰を言い渡す。

「「いままで以上の笑顔で『お帰りなさい』と迎えてください――！」

」

「……………えっ？」二人からの言い渡された罰にミリヤは驚く。

（まさか、そんなことを言われるなんて）

「これは、厳しい罰ね……………これまで以上の笑顔……………私にできるかしら？」

ミリヤの疑問の言葉にラグナとリリオがハードルを上げる。

「言つとくけど、生半可な笑顔じゃ駄目だからな」

「私達が納得するまで、何回も笑顔で『お帰りなさい』って言わせるからね！」

そんな言葉にミリヤは苦笑いすると。

「一から笑顔の練習しなくっちゃね」

と罰を受けることを決めたのだった。

こうして、二人の都市警察官が学園都市に向かう。

母から課せられた罰を受け。

母に課した罰を受けさせるために。

しかし、二人は知らない。これから向かうであろう、学園都市で様々な出会いがあり、更には二人の追っている事件の手がかりがあることを。

三話（後書き）

主人公達の存在が（――；）
薄い？

どうも、ここまで読んでくれた方々ありがとうございます。

あと一―二話で原作にいけると思います。

原作レギオスファンの方々には不愉快な思いをさせる作品かもしれませんがどうか。今後も読んでもらえると鉛のクワガタは嬉しいです。

感想にコメント、お待ちしております。

四話（前書き）

鋼殻のレギオス【黒の秩序】四話完成しました。

また展開が急に進みますし。

文法とうが滅茶苦茶ですが楽しんでいただければ幸いです。

それでは【黒の秩序】の四話目をどうぞ。

四話

「マック課長……ありがとうございました」

「……ありがとうございます」

アレルタ都市警察本部ロビーにて二人の少年と少女の声が響く。

「ああ……まあ、何だ？　お前さんらが学園都市に行くことを決めたのはいいが何で、俺のところに来るんだ。準備とかあるんだろ？」

マックが残っていた仕事を片付け、昼食をとり外に出ようとしたところ。

マックの目の前に、リリオを背中に乗せたラグナが突然降ってきて、リリオを地面に下ろすと、二人が学園都市行きを決めたことをいい。

マックにたいして、礼を述べる。

「母さんから全て聞きました。……何故学園都市に行かせたいか」

「……どうして。マック課長に頼んだのかもある程度は聞きました」

ラグナとリリオの言葉を聞き、マックは苦笑いをする。

「……そうか、全部聞いたんだな。それなら安心して良さそうだな……おい、クレア。近くにいろだろ」

『何故、私が近くにいると?』

「なあに。そろそろ、上からの返答がくる時間だからな」

マツクの元に一つの菱形をした念威端子が姿を表す。

ラグナとリリオは見覚えのある念威端子が出てきたことに少し驚いた。

「クレアさん、お久しぶりです」

「……お疲れ様です。クレアさん」

ラグナとリリオは過去数件の事件の際。クレアの得る情報には多く助けられている。

『こちらこそお久しぶりです。ラグナくん、リリオさん』

念威端子からは落ち着いた少女の声が発せられ二人に挨拶をする
と、側にいるマツクに要件を伝える。

『先ほど、上からリリオ警部とラグナ警部補の学園都市行きの許可
がありました』

「だそうだ、よかったなあ二人さん」

「「ありがとうございます。マツク課長」」

二人は再び礼の言葉を言う。

『それにしても、上もよくラグナくん達の学園都市行きを許可した
ものですね。仮にもアレルタでの検挙率第三位なのに』

ラグナとリリオのコンビはアレルタで起こる、犯罪の検挙率はト
ップレベルのエースでもある。

「まあ、そこら辺はあれだ……大人の事情ってやつだ」

マツクが見せる悪い表情と『大人の事情』と言う言葉にラグナ、
リリオ、クレアの三人は思った。

『脅したなこの人』

「……本当に、何者なんだろうな。マツク課長って」

『その言葉に激しく同意します』

マツクは顔が広く、様々な情報網を持っていることは部下である
三人は知っていたが、まさか。都市警察の上官達をも脅せる情報を
持っていることに驚きを隠せない。

「まっ、なんにせよ……これで二人はなんも気にせず学園都市にい
けるってわけだ」

「重々、ありがとうございます。あと、クレアさんありがとうございます
ざいます」

『私はついで扱いですか。酷い男ですね』

「いや、別にそんな訳じゃ……」

「ラグ、ダメだよそんなこと言ったら」

「リオまで敵に回った!？」

それからしばらく、騒ぐラグナの声がロビーに響いたのだった。

「ところで、課長に頼みがあるんですが」

「ん？ 頼みだあ？」

一通り騒いだラグナは落ち着きを取り戻すと、先程までとは違う、真剣な雰囲気を出しマツクに言う。

「俺とリオがいない間……例の事件の情報収集をお願いしたいんです」

「……お前。ミリヤさんの約束破る気か？」

ラグナの言葉に、マツクは怒気を孕ました声を発するとそこにリオが口を挟んでくる。

「私もラグも、ミリヤ叔母さんの約束を破る訳じゃないです。……ただ、私達が戻ってきたときに少しでも、手がかりがやっぱり欲しくて……」

「お前らな……」

リリオの言い分はマックにも分かる、いままで血眼と書いていいほどに調べてきた事件。

しかしその殆どの情報は空振りに終わるものが全てだ。

これはマックの広い情報網を使っても同じことである。

マックが渋っていると、菱形の念威端子。

クレアが口を挟んできた。

『お二人の言う、事件とは十年前の廃都調査隊の事件ですね』

「「「……っ！」「」」

クレアの言葉に三人は動揺を隠しきれなかった。

このことを知っているのはラグナ、リリオ、リリオ、マック、ミリアの四人だけだからである。

三人の反応を感じたクレアは言う。

『そんなに過剰反応しないでください。私がこのことを知ったのはついさっきですので』

クレアの言葉にマックはすぐに思い至った。

「クレア、お前さん。あのときの資料見やがったのか」

『ええ、誰だって未解決事件の資料を読んでいるのを見ると気になりますし。私個人も少なからず関わりのある事件ですので』

「どういうことですか。クレアさん」

『私にも少なからず関わりのある事件ですので』

この言葉に反応したのはリリオである。

ポニーテールにした黒髪から淡い、夜明けの太陽のような輝きを放つ。

「リオ、落ち着け。念威が漏れてるぞ」

「あつ……ごめんね、ラグ」

淡く輝いていた髪の毛はゆっくりと輝きを失ってゆき、元の黒い髪の毛に戻っていった。

そんなリリオを落ちつかせたのはラグナである。

「クレアさん……もちろん、お聞きしてもいいですよね？」

ラグナの落ち着きはらった声にクレアは。

『構いません。……ここではなんですので、屋上に来ていただけますか？』

「わかりました。リオもそれでいいだろ？」

「……ラグがそう言うなら」

「もちろん、俺もついて行くからな」

こうして。ラグナ、リリオ、マツクの三人は屋上で待つであろうクレアの元に足を進める。

アレルタ都市警察本部屋上。

人氣が全くといってない屋上に一人の少女。

クレア・ノイマンは肩口まで伸ばした髪を念威によって橙色に輝かせる。

その手には一つの鍊金鋼が持たれ、クレアの側には菱形の念威端子が浮遊している。

念威繰者が使う重晶鍊金鋼（バーライトダイト）とその念威端子だ。

重晶鍊金鋼は念威繰者用に開発、調節された鍊金鋼であり、部品の一部を念威端子として使用する。

念威繰者は武芸者が持つ剋の代わりに念威と呼ばれる力を持ち。

武芸者の使用する。外力系剋剋、内力系活剋の代わりに高い情報収集能力と演算処理能力を持つ。

主に武芸者の戦闘時のサポートや情報収集が念威繰者の仕事とな

る。

余談だが、この場にいるクレアは言わずとも、いま現在。屋上に向かっているリリオも念威繰者である。

そんな念威繰者であるクレアは手に持った所々に隙間ができている四角い物体。

愛用の重晶鍊金鋼に排出していた端子を戻すと、鍊金鋼を基礎状態に戻した。

「ふむ……課長はともかく。ラグナくんやリリオさんにはどう伝えましょう」

これから屋上に来るであろう、アレルタ都市警察でも優秀な武芸者に念威繰者の二人にどう説明するかを考える。

十年前の廃都調査隊行方不明事件。

20名にもおよぶ武芸者、念威繰者が姿を消すという謎が多い事件だ。

現場になった廃都市に残されていたのは、調査隊が乗っていたランドローラーに鍊金鋼のみ。

翌日の調査によって新たに発見されたのは、昔に滅びたと言われる狼を模したお面の欠片。

そして……調査隊の誰のものでもない一本の鋸状の刃の剣型鍊金鋼だけ。

クレアがこのことに興味を抱いたのは過去数件の事件の資料を調べていたのが切っ掛けである。

ラグナ警部補、リリオ警部が担当した事件の中に犯行の際、仮面で素顔を隠した者。もしくは鋸のような錬金鋼を使った犯人に偶然とは言えない程接触していたからだ。

今朝のマックが未解決事件の調査資料を確認し、その後一人で調査資料を確認し。気づいた。

これが、ラグナとリリオが一部の犯人に拘っていた理由なのかと。

……調査資料の一枚の写真を見て思い出してしまった。

（この仮面は……確か）

屋上に一つしかない出入口の扉が金属特有の音を響かせながら開き。三人の人物がやって来た。

「お待ちしてました。ラグナくん、リリオさん、課長」

ひとまずクレアは先程までの思考を放棄すると。話を聞きに来たであろう、ラグナ、リリオ、マックの三人がクレアの元にやって来た。

『私個人も少なからず関わりがある事件ですから』

先程のクレアの言葉がラグナの頭に何度もリピートされる。

長年追い続けてきた事件。

全くと言っていいほど情報が入らない事件。

ラグナの……いやラグナ達の生活を変えたであろう、原因。

事件の情報を持ち合わせているかも知れない同僚の念威繰者。

それがラグナの心を揺さぶる。

（まさか……こんな近くに情報を持っている人がいたなんて）

ラグナは心の中で舌打ちする。

（クレアさんが持っている情報……本物なのか？）

「……いて……の……グナ？」

（いや……この際、本物がどうかはどうでもいい）

「……え……ナ？」

（まずは話を聞くのが先だ）

ラグナは心の中で、何度も自問自答を繰り返していると。

「聞いているの！　ラグナ！？」

「うおっ！　なっ……なんだ！？」

「おいおい……しつかりしろよ？ ラグナ」

リリオの怒鳴り声がラグナの思考を現実に戻す。

ラグナの慌てた反応にリリオは心配そうに言う。

「もしかして……クレアさんのこと考えてた？」

「……ああ」

「クレアさん……関わりがあるって言うてたけど。ラグはどう思う」

「……そうだな、俺の考えでは二つだけあるな」

ラグナにはクレアの関わりがあると言う。言葉に二つの考えが浮かぶ。

指を一つ立てる。

「まず一つは、クレアさんの家族の人が俺達と同じ事件で行方不明だということ」

可能性は低いがなっ……とラグナは付け加える。

なぜならクレアはあるとき、マックの見ていた調査資料を読んで事件を知ったといった。

同じ事件の被害者で、同じ職場であるなら少なからずともラグナ達の元にコンタクトをとっていたはず。

いくら、ラグナ達が密かに調べていたとはいえ、念威繰者である

クレアはすぐに知ることができただろう。

無理矢理すぎる理由だが、これなら納得がいく。

「そして、二つ目。この事件とは別に似た事件があったことかな」

「二つとも、穴だらけじゃん……」

「ははっ、考えるのは本来リオの仕事で、俺の仕事は荒事だからな」

ラグナとリオは仕事ではコンビを組んでおり、やはりと言うか、リオが調査、考察。ラグナが検挙に荒事担当で仕事を行っている。

「お二人さん、楽しくお話するのはいいが……実際のところ。クレアが有益な情報を持ってたらどうすんだ？」

マツクの疑問はもつともなものだ。

せっかく、ラグナとリオが学園都市に行ってくれると言った。矢先に情報の持ち主の登場だ。

これでもし、クレアが持っている情報が本物なら。

この二人は学園都市行きを止めるのではないかと不安になる。

しかし……この二人はマツクの予想を嬉しい形で裏切ってくれる。

「大丈夫ですよ……課長。もう母さんと約束もしましたし……」

「……ミリヤ叔母さんとの約束を守らないといけないから」

「……そうか」

二人の決意を聞きマックはやれやれと言わんばかりに首を振る。

「あつ……着いたよ。ラゲ、課長」

三人はいつの間にか目的地である、屋上の入口にたどり着いた。

「いいかお前ら？ クレアがどんな情報を持っていようが。冷静に落ち着いて話を聞け。いいな？」

「わかってますよ。課長」

「……はい」

「じゃあ……開けるからな」

マックは屋上への入口のドアノブに手をかけ。

ゆっくりとドアノブを回すと扉は金属特有の音を響かせながら開いた。

「お待ちしてました。ラゲくん、リリオさん、マック課長」

扉を開けた先にクレア・ノイマンが立っていた。

「立ち話もなんですので、座られてはどうですか？」

クレアは三人の存在を確認し。側に備え付けられているベンチを勧める。

「いえ……結構です」

ラグナはそれをやんわりと断り、リリオが口を開く。

「先程。クレアさんは十年前の事件に対して御自身が少なからず関わりがあると仰っていましたか……」

「どう言つことですか？ リリオはクレアに訪ね。マックはただ静かに傍観にてっしている。」

「……そうですね」

クレアは整った眉をへの字にし悩んだような表情を見せ。マックに尋ねた。

「そういえば、過去の調査資料に二つの物証があつたと書いてましたよね？」

「一つは調査隊の誰の物でもない錬金鋼。」

「二つ目は狼を模したと思われる仮面の欠片。」

「んっ？ 確かにそうだがそれがどうした」

写真に写されていた二つの物証を思い出したマックは疑問に思つ。

ラグナとリリオも疑問を持ったが。続けてクレアは聞き捨てなら

ないことを言う。

「私は過去に。あの写真の仮面と同じ物を見た覚えがあるんですよ」

「……なっ!？」

三人の驚きの声にクレアは気にした様子もなく話を続ける。

「私の記憶では、確か……調査隊が廃都市に派遣される数ヶ月前のことなんです……」

「……ですが？」

口ごもるクレアにリリオは続きを促す。

「……実は」

クレアは罰の悪い顔でラグナ達に言った。

「あの写真の仮面……私の父が一度、被っているのを見たことがあるんですよ」

クレアの父が現場に残されていた物と同じ仮面を持っていた。

「それは……他の都市で量産されている物ではないんですか？」

リリオはクレアが見た仮面を量産されている物ではないかと疑問を抱き質問するがクレアからは意外な反応が返ってきた。

「消えたんです」

「えっ？」

「言葉通り、消えたんですよ。父が……私の目の前で」

「……」

クレアの言葉に三人とも言葉が出なかった。

「私はすぐさま母に言いました……」

クレアは一度息を吐くと続ける。

「母に私の言葉は信じて貰えませんでした。当時の私はまだ七歳だから子供特有の戯れ言だと思われましたよ」

「……でも。その日から。私の父は二度と家に帰ってこなくなりました」

それからは大変だった。都市警察に被害届けを出し事情聴取を受けるも、クレアが言うことは誰も信じなかった。

それもそうだろう。仮面を被っただけで人が一人消えるなど。安いホラー映画ではないか。

「それから、私達家族に都市警から父は行方不明という扱いを受けました」

忘れられないあの仮面。

父が姿を消す原因であろう狼のような仮面の形を。

これ以上のことはもう思い出さなくなかった。

「……私が話せる情報はこれぐらいですね」

「いえ……ありがとうございます」

「……クレアさんのお父さんの行方不明事件と繋がりがああるかもしれないですね」

「まあ、たいした情報量じゃないが。都市調査隊行方不明の前に一人の武芸者の行方不明事件に出てくる。狼の仮面か……」

（こりゃあ、過去の行方不明事件とかを洗ってみる必要があるかな）

それから、ラグナとリリオはマツクに改めて過去の行方不明事件についての情報収集を頼む。

するとクレアからも情報収集に協力するとの申し出があり。

クレア曰く、いまさら父の事なんかどうでもいいが。あの仮面については気になるからと言われ。

ラグナ達は苦笑いするしかなかった。

こうして、二人は上司二人に行方不明事件の調査だけを頼み。

学園都市へ行くための準備を進めるため、帰路につくのだった。

四話（後書き）

次回でツエルニに出発させるつもりです。

クレア、マック、ミリヤは手紙越しにですが登場する予定です。

クレアの重晶鍊金鋼はフェリが使っているような杖型ではなく、キューブ状です。

これは著者が変わった形の念威端子をだしたかっただけです。

リリオも変わった形の端子ですが登場はツエルニに行ってからになります。

四話を読んでいただき、まことにありがとうございます。

感想やコメント随時お待ちしております。

五話（前書き）

鋼殻のレギオス【黒の秩序】第五話

短いですが完成しました。

楽しんでいただければ幸いです。

五話

都市の外縁部では、巨大で強固な脚が大地の岩盤を踏み抜く轟音が辺り一面に響きわたる。

外縁部に位置する放浪バスの停留所。

「二人とも。忘れ物とかないわね？ 健康にも気をつけて、歯磨き、うがい、手洗いに、えっと……それから……」

都市の脚が響かせる轟音に負けないよう大きな声を出す一人の女性がいる。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。なあ、リオ？」

「仕方ないよラグ。これからしばらくの間。顔を会わせることもできないからミリヤ叔母さんじゃなくても心配になるよ」

今日。放浪バスに乗り学園都市へと向かう。ラグナ、リリオで。

そんな二人に、やたらと心配そうに声をかけ続けるのは二人の保護者であるミリヤ・エデュライネスだ。

「まあまあ……ミリヤさん。この二人なら大丈夫ですよ」

「マツク課長のおっしゃる通りです。ミリヤ様。お二人ならば、ちよつとやさつとじゃ体調をくずしたりなんかしませんよ」

ミリヤを諫めているのはラグナとリリオの上司であり、この場で

ラグナとリリオが信頼しているマックと。意外な繋がりから協力関係を結べた同僚のクレアである。

この二人には自分達がない間、過去にアレルタで起こった行方不明事件の調査を頼んだ信頼できる仲間だ。

「俺達がない間、母さんのことお願いしますね」

「おう、任せとけ」

「ラグナくん達は此方のことは気にせず、学生生活を楽しんできてください」

「ありがとうございます。クレアさん、マック課長」

上司二人に今後のミリヤのことを任せ、二人は各々の荷物を手に持つ。

——放浪バスの発車時刻が近づいてきたのだ。

「……ラグナ、リリオ」

ミリヤは二人の名を呼び、側に近づくとギュッと二人を抱き締め。

「……母さん」

「……ミリヤ叔母さん」

「……二人の思出話。楽しみにしてるからね？」

涙を堪えているのか、ミリヤの体は若干震え、声も少し震えている。

「期待しとけよ。母さん」

「沢山、思出作ってくる。……お母さん達にも話してあげたいから」

二人はミリヤを抱き締め返すと、丁度放浪バスの発車時刻がやってきた。

「そろそろ時間だ。お三方」

「あっ……そうですね」

「……課長。多少は空気を読みましょうよ」

「……おい、そりゃどういうことだ？」

「言葉通りの意味です」

マックとクレアは不毛な会話をしている間。
抱き締めあっていた三人は名残惜しそくに、体を離すと、お互いに笑顔を見せ。

「行ってきます。母さん」

「行ってきます。ミリヤ叔母さん」

「ええ。行ったらっしゃい。ラグナ、リリオ」

ラグナとリリオは荷物を持ち放浪バスの車内へと入って行った。

このとき、ミリヤの目にはラグナとリリオが、あの日。

廃都市に向かって行く三人に影を重ねてしまう。

（……いいえ）

しかし、ミリヤは小さく首をふるとその影を消す。

（この子達はちゃんと帰ってくる）

放浪バスに乗り込んだ二人は車内から手をふり。ミリヤはそれに手をふりかえす。

（私は私にできることをしなくちゃ）

放浪バスはエンジン音を響かせ都市外に向かって出発していった。

五話（後書き）

次回から原作に入っていきたいと思います。

ラグナとリリオは勿論、武芸科の生徒です。

……ええ、二人の身体を鈍らせる訳にはいきませんから。

感想やコメントがまったくなくことに若干凹み気味の著者ですが。

お気に入り登録してくれてる方が五人いるだけで嬉しいです

（o<ω>o）

登録してくれてる方々。真にありがとうございます。

六話（前書き）

六話完成しました。

今回は原作キャラ三人の登場です。

……三人のキャラが壊れないよう気をつけないと。

相変わらずの執筆熟練度の低さですが少しでも楽しんでいただけると幸いです。

六話

学園都市ツエルニ。

学園都市連盟に加入している都市の一つであり。

三十年前までは学園都市連盟の大人がいたが、今現在は全て学生により自治されている。

ツエルニの放浪バスの停留所より二人の少年と少女が姿を現す。

「相変わらず、降りにくいな放浪バスってのは。リオの背が羨ましいよ」

「それって……私に対する嫌味かなラグ？」

放浪バスから降りてきたのはラグナ・エデュライネスとリリオ・クルールである。

ラグナは高すぎる身長の子かバスから降りるのにワザワザ屈み下車している。

リリオはラグナよりも頭四つ分は背が低いのですんなりとバスから下車することができ。

リリオの身長を羨ましがっているラグナに冷めた視線を送っている。

「じつ……冗談だ。リオ。頼むからその冷たい視線をやめてくれ」

ラグナはそんなリリオの視線に耐えきれず、すぐさまに謝る。

「じゃあ、私の分の荷物も持ってね」

そんなラグナの表情を見てリリオは荷物持ちをラグナにお願いし。

「はあ……了解です。リリオ警部」

「うん…… よろしい。 それではラグナ警部補。早速入学手続きを済ませにいきましょう」

ラグナはしかたがないとばかりにリリオの荷物を持ち、入学手続きの受付に向かったリリオの跡を追いかけて行った。

「…… 学園都市ってのは。 本当に学生しかいないんだな」

「…… 本当だ。 それに見てみてよ。 防犯装置の数もすごく少ないよ」

「すげえな、アレルタなら考えられねえ警備の甘さだ。 …… それともこれが普通なのか？」

「さあ？ 私にはわからないよ」

入学手続きを済ませたラグナとリリオは一度制服に着替えるため、教えられた更衣室に向かい青と白を基調色とした武芸科の制服に着替えた。

入学式が始まるまでまだ時間があると言われ。入学式の時間まで会場の近くを探索していた。

中央には校舎群があり、それぞれの各学科の為の設備が目映る。施設があるということはそれなり貴重な研究、実験データがあり。それを狙う犯罪者もいる。

しかしラグナとリリオには各施設の防犯、警報装置の数はとても少なく感じられる。

「まっ。防犯装置が少ないってことはアレルタより、犯罪が少ないってことか」

「……やっぱり。アレルタって物騒な都市だったんだ。ミリヤ叔母さん大丈夫かな？」

ラグナの言葉にリリオはいまは遠い場所にいる、ミリヤのことが心配になる。

「心配すんなよ」

「あっ……」

そんなリリオの頭にラグナの大きな手のひらが乗せられる。

「あっちには、マック課長やクレアさん……他に優秀な都市警がいるんだ。俺達が心配しなくても大丈夫だろ」

「……そうだね。大丈夫だよね」

「そうそう。大丈夫、大丈夫」

ラグナはポンポンっとリリオの頭を叩くと近くのスピーカーより放送が流れる。

『間もなく。入学式を行いますので。新入生の皆様は大講堂にお集まり下さい。……繰り返しします……』

「時間みたいだな……」

「行こう。ラグ」

「おう」

放送を聞いた二人はいまは遠くにいる母親への心配を消し。そのまま大講堂へと向かっていった。

入学式が行われる大講堂には大勢の生徒が集まっております。

様々な学科の制服を着た生徒がいる。

ラグナとリリオはそんな大講堂にようやく到着した。

「まだ、始まってないみたいだな」

ラグナは辺りを見回すが講堂の中はいまだにお喋りに夢中になっている生徒ばかりだ。

そんな生徒達の身長も大小様々だ。

「リオ」

「ん？ どうしたの」

ラグナは側にいるリオに声をかけると。一度屈み腕をリオの前に出し。

「……乗っとけ。こんだけ人がいると。人波にいつ呑まれるかわからないからな」

身長が低いリオが人波に拐われないよう提案するラグナにリオは考える素振りを見せると。

「お願いするね」

「しつかり。掴まっとけよ」

ラグナに抱き抱えられるように持ち上げられリオの視界は一気に高くなり周囲にいた他の生徒が驚く表情をしているのがわかりリオは蚊の泣くような声で呟く。

「……人を見下ろすのはいいね」

「ん？ なんか言ったか？」

呟きが聞こえたのかラグナが何かと聞いてくるも。

「なんでもない」

とリリオは誤魔化した。

それからしばらく、リリオが優越感に浸っていると。

「うわあ！ ナツキ、メイっち！ 見てみて、巨人と小人がいるよ！」

「コラッ！ 落ちつけミイ。……だいたいだな初対面の人に向かってしつれいだろ！」

「……ミイちゃん、落ちついて」

「……なんだ？」

「……………」

いつの間にか、ラグナとリリオの側に三人の少女が集まっており、その中の一人がリリオを抱き抱えたラグナを指差していた。

一人はラグナ達と同じ武芸科の制服を着た赤い髪の少女。

他二人は一般教養科の制服を着ており。ツインタールの髪をピョコピョコと揺らす少女にそんな少女を宿める大人しそうな少女だった。

「……私たちになにか用なの？」

そんな三人にリリオは少し不機嫌そうに声をかけると赤い髪の毛の少女がツインタールの少女の頭を強引に下げさせ二人に謝罪する。

「あたしの連れが失礼してすまない。あたしの名前はナルキ・ゲル二。……すまないが二人の名前を教えてもらってもいいか？」

ナルキという少女の突然の謝罪にラグナは戸惑うも。

「あつああ……俺の名前はラグナ・エデュライネス。それでこいつが……」

「……リリオ・クルール」

（リオの奴。いきなり機嫌が悪くなったな）

「ええつと……ナルキさんだったかな？」

「そうだが？」

「そっちの二人を紹介して貰えるといいんだけど」

先程までとは、違うリリオの機嫌にラグナは内心首を傾げる。

その間にナルキは側にいる二人の少女に声をかける。

「ほら、二人とも自己紹介しろ。あと……ミイは謝罪を忘れるなよ」

ナルキが声をかけるとミイと呼ばれたツインテールの少女が二人の前に出てきて自己紹介をする。

「わかってるつて。あたしの名前はミイフィ・ロツテンよろしくね！ それと……さっきは大きな声出してごめんなさい」

「……………メイシェン・トリンデンです」

ミイフィの自己紹介と謝罪のあとに続いた大人しそうな少女はメイシェンという名らしい。

「気にしないでいいよ。えっと……………ミイフィさんにメイシェンさんだっけ？ 改めてよろしく。ラグナ・エデュライネスだ気軽にラグナとも呼んでくれ」

「いやゝ。そう言って貰えると助かるよ。ラグニャン」

「よっ、よろしくお願いします」

「……………ん？」

改めて自己紹介したラグナだったがミイフィに名前を呼ばれたときに変な違和感を感じ、ラグナはミイフィにもう一度聞こうとする、今まで黙っていたリリオが口を開いた。

「……………いまのラグニャンって何？」

「やっぱり……………ラグニャンって呼ばれてたのか」

ミイフィから唐突に呼ばれたラグニャンという名にラグナは変なむず痒さを感じた。

「そそ、あだ名があると仲良くなれるからね。だからラグナはラグニャンで、リリオちゃんはリリちゃん」

「……………ラグニャンってなんだよ」

「……リリちゃん。なんかくすぐったいかも」

ミイフィはあつて十分も経っていないのに二人に変わったあだ名を付け。

二人を戸惑いに追いやった。

戸惑いに追いやられた二人を現実に戻したのはナルキの質問だ。

「ところで、ラグナとリリは何処の出身なんだ？ 私達三人は全員。ヨルテムの出身なんだか」

「交通都市ヨルテムか、確か俺達の乗った放浪バスは、一度もヨルテムには寄らなかったな」

「うん、残念だったね。……それと私達の出身はアレルタ」

リリオの言った出身都市にナルキ達三人の空気が一瞬固まった。

硬直からすぐに気を取り戻したのはナルキだ。

「……ラグナ。今のリリの言ったことは本当か？」

「ん？ 本当かどうかしたか三人とも？」

「……？」

ラグナとリリオの疑問に答えたのは意外にもメイシェンだった。

「……………アレルタって、犯罪都市と呼ばれる場所だよね？」

「……犯罪都市？ リオ。聞いたことあるか？」

「……私はない。メイシエンさん詳しく教えてもらってもいい？」

「あつ、うん、いいよ。……あと私のことはメイって呼んでいいよ
リリちゃん。」

「……わかった。それじゃあ教えて貰えるメイ？」

メイシエンからあだ名で呼ばれ、リリオはラグナ以外の人をあだ
名で呼ぶことに気恥ずかしさを覚えたが、リリオはその恥ずかしさ
を押さえ込みメイシエンに理由を聞く。

「えつと……私達が住んでる都市が交通都市ってよばれてるのは知
ってるよね？」

「ああ、確か放浪バスの統一をヨルテムが担っていて都市間流通も
一番なんだろう？」

交通都市ヨルテムは全ての都市の位置を特殊なネットワークで把
握しほとんどの放浪バスはヨルテムから出発し、ヨルテムに一度は
寄るらしい。

——余談だがラグナ達の乗ってきた放浪バスはツエル二の後に
ヨルテムに寄ったらしい——

「ええつと、それで、その……」

「……どうしたのメイ？」

メイシエンは少し、言い辛そうにしており、リリオはそんなメイシエンを心配していると。

「そこからは、あたしとミイが話そう」

ナルキとミイフィが続きを話すと言い出した。

「ヨルテムには、放浪バスがよく来るからさ。他の都市の話とかよくきけるんだよね」

「なるほどな」

ラグナはミイフィの言葉で大体の理由を把握した。

「アレルタに寄ったバスの運転手や旅行者が言っていたんだ」

『あそこは、一日に十回以上はサイレンが鳴り響いて。引つたくりや、恐喝に強盗に合うばかりだ！あの都市は犯罪ばかり起るんだ』

「てね。……だからほとんどの人はアレルタによる際は細心の注意を払ってるんだって噂だ」

「あたしが聞いた噂もそんな感じだったよ。別の意味で有名だよアレルタって？」

「……そう言うことか」

「……納得だね」

ラグナとリリオは三人から聞いた話で全てに納得しているとミィ
フィが話かけてきた。

「そんなアレルタ出身の二人はどうしてツエルニにきたの？」
「コラっ！ ミィ、いい加減にしないか！」

これまた不躰な質問をしてきたミィフィにラグナは苦笑いしながら
言った。

「気にすんな。アレルタは犯罪が多いのは確かだしな。あと俺達が
ツエルニに来た理由はな……」

一度は息をつくとリリオが続いた。

「友達作りのため」

「……えっ？」

リリオの言葉に三人は疑問の声を上げるがリリオは気にせず続け
る。

「私達には同年代の友達が少ない……だから友達作りのため。ツエ
ルニに行くように言われたの」

（これでいいよねラグ？）

（OKだリリオ）

二人はアイコンタクトで会話する。

ラグナとリリオは都市に到着する前に前以て打ち合わせをしていた。

学園都市にきた理由。本当は十年近く、子供らしく過ごせなかった分を少しでも取り戻して欲しい。

そんな、母親の気持ちを汲んでやって来たこれが本当の理由。

「じゃあ、そろそろ入学式も始まりそうだから俺達は前に向かうぞ」

「了解。ラグ」

三人に説明し終えるラグナはリリオを抱え直しその場から立ち去ろうとするもナルキから呼び止められた。

「待ってくれ。ラグナ、リリオ」

「どうした。ナルキさん？」

自分達を呼び止めたナルキにラグナは足を止めた。

するとナルキは他の二人に頷きかけ言った。

「あたし達はもう。お前達の友達だからな」

「うんうん。友達だよラグニャン、リリちゃん」

「こっ、これからよろしくね？」

「……………」

ナルキの言葉にラグナとリリオは呆けた顔をするがすぐに三人に笑顔を向け言った。

「今日から六年間よろしく」

「よろしくね」

『じゃあ、入学式の後』でとラグナがいうとリリオを抱えたまま人混みの中に消えていった。

——ただ、ラグナの高すぎる身長とリリオを抱えていること
でかなり目立っていた——

その場から去っていく巨大なラグナと言う少年とそれに抱えられた少女リリオを見送ったナルキ、ミイフィ、メイシエンは息をついた。

「……………まったく。ミイが後先考えず大声を出したときはどうなると思ったか」

「でもよかったじゃん、早速新しい友達ができたんだしさ」

「リリちゃん。小さくて可愛かったね」

三者算用いろんな考えをしている。

「それにしても……………ラグナはデカイな。ここからでもまだ彼奴の背中見えるぞ」

「ほんとだ。すごーい。リリちゃんさぞかし良い眺めだろうね」

ナルキとメイシェンの言う通り、ラグナとリリオは大分奥に移動したがその後ろ姿はまだ確認できた。

「リリちゃんとラグニヤンはアレルタの出身で言ってたけど。いい人達で良かった」

「それもそうだな。あたしも最初アレルタの出身と聞いただけで警戒したからな」

「ナツキもメイっちも心配すぎだよ。あたしの目に狂いはないの」

ヨルテム出身の三人娘はそんな他愛ない会話をしながら入学式が始まるのを待つのだった。

六話（後書き）

ここまで読んでいただき本当にありがとうございます。

第七話では原作主人公の登場です。

できるだけレイフオンの出番を消さないよう頑張るつもりです。

感想やコメント随時待っています。

七話（前書き）

短くてすいません

第七話完成しました。

今回はラグナの劉技の一つが出ますが、著者にはネーミングセンスがないので凄い単純な名前になりました。

更に二人の原作キャラが出現します。

展開が急すぎかもしれませんが楽しんでいただければ幸いです。

七話

「……どうしたもんかなこれ」

「……無視する？」

「そういう訳にもいかないだろ……」

頭に左手をやり、やれやれと言わんばかりにタメ息をつく。

ラグナとリリオの視界の先で二人の武芸者がその身体から剄をみなぎらせ、一触即発の雰囲気醸し出していた。

ことの始まりは、些細な出来事だった。

入学式が始まるまであと数分だというとき。

一人の武芸科の生徒が同じ武芸科の生徒にぶつかる。

もともと血の気が多い性格なのか二人の生徒は口論を始める。

相手が自分の出身都市が敵対している都市の出だと分かったと、更に口論がエスカレートし。

二人の生徒は身体から剄を放ち始めたのだ。

そんな武芸者二人の放つ剄の流れを見たラグナ達はどういうと。

「あいつら……剄の制御全然できてないな」

「……今なら私でも鎮めれるけど……どうする？」

「……そうだなあ。いい加減止めないと回りの一般生徒に被害がでるからな……」

辺りを見回すと、二人の雰囲気の影響を受けたのか、他の生徒にも険悪な雰囲気が漂い始める。

雰囲気を感じ取ったラグナは今から説得しても無駄だと悟り。再びタメ息をつく。

「リオ、俺の低出力の衝刺であの二人を鎮める。ナビを頼む」

「別にいいけど……ラグの腕前ならナビいらないんじゃない？」

「下手して、他の生徒に当てる訳にもいかないからな」

「了解」

ラグナは右腕で抱えていたリオを降ろすと、そのまま右手の人差し指と親指を銃に見立て構える。

同時に、リオは僅かに念威を放出しラグナの射線上に障害となる生徒がいなかったかを確認する。

「……標的の近くにまだ数名の一般生徒を確認。……野次馬みたい。射線上に影響はないよ」

「了解つと、それじゃあ騒ぎを納めるとしますか」

ラグナはそのまま、構えていた右手人差し指から漏れでた剄を小さく圧縮し、出力を押さえ。

豆粒大の衝剄を二人の武芸科生徒のこめかみに向かって一瞬で二発放った。

ラグナの放った衝剄は何の妨害も受けず、騒ぎの原因の二人へと音もなく向かいこめかみに直撃すると思いきや。

「なにっ!？」

「……速い」

二人同時にその場に倒れ込みラグナの放った衝剄はそのまま奥の壁に当たり小さな焦げあとを作った。

気絶した二人の生徒の元にはいつの間にも現れたのか、一般教養科の制服を着た一人の少年が立っていた。

(……いまの衝剄は)

大講堂で騒ぎを納めた少年は茶色の髪に藍色の瞳をした少年。

レイフォン・アルセイフは辺りを見回すとそれを発見した。

騒ぎを起こした二人の頭部があった位置を飛び越し、その先の壁に付いた二つの小さな焦げ跡。

レイフォンが見つけた二つの痕跡。

それは、ラグナが放った衝剄の着弾の痕跡である。

（いまの衝剄は……恐らくこの二人を気絶させるために放たれたもの）

「でも……いったい誰が？」

レイフォンがいまの衝剄を放った人物のことについて考えていると、大講堂のスピーカーより。レイフォンを凹ませる放送が流れた。

『先程の騒ぎの生徒二人とそれを納めた生徒はこのあと、至急生徒会室にお越し下さい。……繰り返します……』

「……………やっちゃった」

放送を聞いたレイフォンの顔が青くなったのは言うまでもなかった。

武芸者同士の騒ぎが起こったため大講堂での入学式はそのまま延期となった。

そして、騒ぎを起こした二人の生徒とその二人を鎮めた生徒はいま生徒会室に呼び出されている。

「あの二人は退学間違いなしだろうが……あの一般教養科の奴はど

「うなるかな？」

「騒ぎを納めたただだから、退学にはならないと思うけど……」

入学式が中止になり、新入生はそのまま現地解散となり、ラグナとリリオは今現在。近くにあった喫茶店であの騒ぎを納めた少年について話をしている。

一般教養科の制服を着た茶色の髪の少年。

あの速さに身のこなしからして武芸者であることはすぐにわかった……が。

「なーんで。あの実力の持ち主が一般教養科の制服を着て学園都市にいるかが気になるな」

「そうだね……あの人。速さだけでも今のラグよりも上だし、多分実力の殆どを出してないよ」

「だろうな。出力を抑えたとはいえ、俺の放てる最速の指弾が着弾する。寸前に気絶させるんだからな」

外力系衝剄の変化

> 指弾<

指先に剄を集中させ圧力をかけ一気に解き放つ。

これがあるとき、ラグナが放った対人剄技で一番速度に優れている技だ。

あるとき、> 指弾くよりも先に到着し、一瞬で二人もの武芸者を鎮めた少年は恐らく自分よりも強い。

アレルタで様々なレベルの武芸者を確保してきた二人には、あの少年が実力を隠していることがすぐにわかった。

「まっ、いまさら気にしたって仕方ないことだな。……あつ。すいませーん、サンドイッチお願いしまーす」

「それもそうだね。……私はチョコレートケーキをお願いします」

二人は話を終わると近くを通った店員に追加の注文を頼むのだった。

二人が注文した品がテーブルに届き、最初の一口を頬張ろうとした瞬間、店内のベルが鳴り四人の男女が店内に入ってきた。

そのなかの一人がラグナと目が合うと声をかけてきた。

「あー！ ラグニャンとリリちゃんだ」

「ん？ ああ……ミイフィさんか。いまから飯か？」

「そう言うことだな。さっきぶりだな、ラグナ、リリオ」

「……さっきぶりです、ナルキさん。それにメイさんも」

「あつ……リリちゃん、うんさっきぶりだね」

「えーっと……誰ですか？」

「あれっ？ さっき二人をのした奴じゃないか。何で武芸科の制服着てんだ？」

「……ほんとだ」

店内に入ってきたのは講堂でラグナ達に話しかけてきたヨルテム出身の三人娘こと、ナルキ、ミイフィ、メイシェンの三人と、さっきまで二人の話題になっていた一人の男子生徒だ。

しかし……男子生徒は、あのとき、一般教養科の制服を着ていたはずなのに。今はラグナ達と同じ武芸科の制服に身を包んでいた。

「そのことについて、今からレイとんに話を聞くと頃なんだ」

「レイとん？」

「もしかして……ミイフィさん。またあだ名を？」

「おお！ よくわかったね。さすがはラグニヤン」

「さすがって……まあいいや。まずは自己紹介だ。……お前と同じ武芸科一年のラグナ・エデュライネスだよしく」

「ラグと同じ武芸科のリリオ・クルールよろしく」

「あつ、えっと、さっき武芸科に転科した。レイフォン・アルセイフです。よろしく願います」

簡単に自己紹介をすませると、レイフォン達はラグナ達のテーブル集まり、何故、一般教養科の制服から武芸科の制服に変わったのかを聞いた。だした。

レイフォンは言う、一般教養科として機関部清掃のバイトをしながら勉強するつもりだったが、あのときの活躍を生徒会長に目撃されており、生徒会室に呼び出され、是非、武芸科に転科しないかと説得され。武芸に転科を決めたのだと。

レイフォンの話を聞いたナルキ達三人はなるほどなあと納得していたが、ラグナとリリオは納得しなかった。

（こりゃ、何か裏で取引つか、脅迫紛いのことでもあったか？）

（あまりにも。都合よく、ことが進み過ぎてるね）

レイフォンの話では制服は余りがまだあったからだと言っていたが、ラグナとリリオの目は誤魔化せなかった。

レイフォンの着ている武芸科の制服はなぜか……右の袖と左の袖で若干長さが違うのだ。

しかし、ラグナはそれを指摘しない。

なぜなら、人には様々な事情があり、深く関わっていけないこともあるからだ。

レイフォンの話を聞き終えたラグナ達は、デザートや飲み物を頼み。無駄話をしながら時間を過ごしていた。

「へえ……レイフォンはグレンダンの出身なのか、ならあの強さも納得だな」

「そうでもないよ……グレンダンには僕より強い人はまだまだいるからね」

レイフォンはあの有名な槍殻都市グレンダンの出身だということを聞き、ラグナは内心納得していた。

（グレンダンの出身か……確か師匠もグレンダンの出身だったな）

ラグナとリリオに戦い方や心構えを教えてくれた師匠と呼ばれる人物もグレンダンの出身だということを思い出した。

「それに、ラグナ達だってアレルタの出身だよな？ アレルタって都市警のレベルが高いんだよね？」

「おっ、レイフォン。よく知ってるな。殆どの人は犯罪者が謳歌する都市なんて言われて、都市警察には見向きもされないのに」

「レイとん、それはどう言うことだ？」

仕返しとばかりに言ったレイフォンの言葉にナルキが何事かと言わんばかりに食いついてきた。

「あつ、そう言えばナツキは都市警を志望してたんだっただね」

「そうなんだ」

ナルキは都市警察を志望。この言葉にリリオは感心の声をもらす。

「それはいいから、さっきの都市警察の話を聞かせろ」

「ナツ……ナツキ、落ち着いて」

余程興奮しているのか、メイシェンのとりなす声も聞こえないらしい。

「あの……すみません」

騒いでいるラグナ達のテーブルの側に、一人の少女が立っていた。

少女は腰まで届きそうな白銀色の髪をしており、武芸科の制服を着ていた。

腰には剣帯が下げられておりそこには一本の待機状態の錬金鋼が収まっていた。

どうやら、この少女に声をかけられたらしい。レイフォン達は、突然現れた少女に呆けた顔を見せていたので、リリオが変わりに口を開く。

「先輩ですか。私達になにか御用でも」

リリオの言葉に、レイフォン達は腰にはある剣帯のラインの色で学年が違うことに気がついた。

「レイフォン・アルセイフさんはどちらですか？」

少女の銀色の瞳がレイフォンとラグナを見つめる。

「僕がレイフォンですけど？」

すぐにレイフォンが名乗りあげると少女は続けて言う。

「用があります、一緒に来ていただけますか？」

「……はい」

ラグナから見ても、いまの少女の瞳には拒否権がないことを告げていた。

「それじゃあ、また明日」

レイフォンはそのまま銀髪の少女と共に喫茶店を出ていき。

「なんだ……あれ？」

残された五人には何とも言えない空気が残っていた。

七話（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

展開的には全然進んでいません。

今回は軽い様子見と言う感じになりました。

ラグナの錬金鋼、リリオの念威端子を早くだしたいです。

次回は皆大好き。

漫画版では、ある意味最強の天然武芸者である、あのお方の登場です。

勿論、スナイパーの人やツナギの人でもありますよ？

感想やコメント随時お待ちしております。

八話（前書き）

八話が完成しました。

レイフォン、スカウトの場面はまんま原作通りになってしまいました。

著者が力不足なばかりに。（T―T）

今回も、ストーリー自体、たいして進んでいませんが。

少しでも楽しんで読んでください。

八話

レイフォンが銀髪の武芸科の先輩に呼び出され。

二人が喫茶店を出て、喫茶店のベルがカラカラと軽快な音を鳴らす。

呆然としていたラグナ達だが、その場に残っていた武芸科の三人、ラグナ、リリオ、ナルキは『……ああ』と声をあげる。

「えっ？　なにが……ああなの？」

三人の呟きにミイフィが疑問の声を投げ掛ける。

「華々しい学園デビューだったから、目を付けられたんだろ」

「確かに、あれだけの騒ぎを一瞬で収めたんだから……」

「目を付けられて当然」

ナルキはさっぱりとした口調で、ラグナは苦笑しながら、リリオにいたっては自業自得とも言わんばかりの言いようだ。

三人の言葉に、ミイフィとメイシェンは理解できず、頭の上に「？」を浮かべた顔でナルキ達を見た。

「さっきの先輩、胸の辺りにバッジがあったろ？」

「え、付いてたっけ？」

ミイファイが首を傾げる。

「……もしかして、銀色の丸いの？」

「おつ、メイ。よく見てたな」

メイシエンはバッジの存在をしっかりと確認していたらしい。

ナルキは肝胆の声をあげ、メイシエンは少し顔を赤くするも、思い出したかのように続ける。

「たしか……十七って数字がバッジにあったよ？」

「それは小隊のバッジだね」

「小隊……？」

「簡単に言えば、武芸科の選ばれた戦士の証みたいなものだよ」

「うっん……よくわかんないなあ」

「そこからは。俺が説明させてもらっよ」

よく意味がわかっていない二人に、ラグナが説明した。

「都市戦争……おつと、学園都市なら武芸大会だったな」

「……都市戦争」

ラグナの言葉にミイフィとメイシェンの顔が少し強張るのが見てとれた。

都市戦争。

人々が住む自立移動都市が年に数回行う都市間での戦い。

自立移動都市はその存在を維持するために、ある動力源を必要としている。

都市の動力源……それはセルニウムと呼ばれる金属であり、各都市はセルニウムを保有する鉱山を複数もちそこで動力源を確保する。

しかし、セルニウムは無限ではない、複数鉱山を保有する都市があれば一つ二つしか鉱山を持たない都市も存在する。

セルニウム自体は大地の汚染が始まってから生まれた金属で、そこら辺の大地を掘れば大量にでてくるが都市を動かすにはそれなりの純度が必要になる。

その為なのか、都市は年に数回。別の都市の移動ルートに入り、セルニウム鉱山を賭けた戦いを仕掛けるのだ。

勝った都市は鉱山を増やし、負けた都市は鉱山を失う。

そして、全ての動力源を失った都市はゆっくりと活動を止め、廃都への道を辿る。

「まっ……ほとんどの都市は、足を止めた時点で汚染獣に襲われるらしいけどな」

小隊の説明をするはずがいつの間にか、都市の命の話にすり変わり、ラグナは顔を青くするミイフィとメイシェンの二人を見てしまう。

「……………あつ」

「……………ラグナ」

「はっ、はい！」

ナルキの怒気を孕んだ声を聞き、ラグナは上ずった声を上げてしまつ。

「いま、あたし達は、小隊の話をしていた筈だか？」

「いつ、いやそれは……………そのお……………」

「だけれが、都市の命の話をしろといった！？」

「すいませんでしたー！！」

「……………ラグ。ダメじゃん」

ナルキの一喝にラグナはすぐさまミイフィとメイシェンに謝る。

それをみたりリオは呆れた声を出し、平謝りをする、ラグナに変わって、小隊の説明をする。

「武芸大会の時の核部隊のことで。それぞれ、司令部、指揮隊、大

隊の三つに分けられて。小隊はそのなかの指揮隊に分類されるの」

「リリの言う通りだ、そしてあたしやこのバカ……ラグナとリリは大隊に属することになるな」

「ついでに言うと、大隊てのは戦争映画とかで言う、二等兵とかで、俺達はその指揮隊である小隊の指示で動き回るんだ」

ラグナは先程のミスからかナルキにバカ呼ばわりされても否定することができず、そのまま会話を繋げた。

「ラグニヤンの説明で少し、不安になったけど。だいたいわかった」

「ははっ、本当に悪かった……ミイフィさんにメイシェンさん」

「ごめんなさいメイ。ラグがバカなことと言って」

「うっん、心配しなくても大丈夫だよ。リリちゃん」

顔色が戻ったミイフィの言葉にラグナは苦笑しながら謝罪し。

リリオはメイシェンを心配していた。

「ならさー」

ラグナの謝罪を聞いたミイフィは悪戯をする子供のような表情を見せて言う。

「ここの支払いはラグニヤンの奢りってことで許したげる」

「はあ。……わかったよ今回は全面的に俺が悪かったからな」

ラグナは先程のこともあるので甘んじて罰を受けることにする。

「それと、も一つ」

「まだ何かあるのか？」

「あたし達のことはあだ名で呼ぶこと！　ラグニャン、さっきからあたし達のことさん付けだもん」

「……わかった。次からはあだ名で呼ばせてもらうつよ」

「わかればいいのだよ、わかれば、ねっメイっち」

「……うつ、うん」

胸を張るミイフィにメイシェンも同意をしめた。

「しかし……レイとんはこれからが大変だな」

「え、何で？　レイとん出世するんでしょ？」

「小隊は武芸科の幹部候補でもあり、スキルマスターとも言われるんだ」

ナルキの言葉に再び疑問の声をあげる。ミイフィに今度こそはと、ラグナが説明する。

「ナル……ナツキが言った、スキルマスターてのはな。」

選ばれた武芸者や念威操者や何かしら突出した能力がないといけな

いんだ。確かに個人個人の高い能力も必要になるけど、小隊つてのはチームだ」

「チームだからこそ競う相手がいて序列が付けられ、満足のいく結果が残せなければ、最悪小隊は解散されて、周囲からは転落と呼ばれたりするの」

「かいがね、この二人の言うとおりだ。小隊にスカウトされたレイとんは、これからハードな学園生活を送ることになるぞ」

「あつ……」

「どしたの、メイっち？」

ナルキの言葉にメイシェンが反応し、ミイフィが聞く。

「……レイとん、機関部のバイトやるって言ってた」

「うは、それマジか？」

「うひゃー、レイとんマジハードじゃん」

機関部のアルバイト、給料はいいのだが、労働環境や就労時間から都市の仕事でもかなりハードな仕事だ。

「大変そうだな」

「そうだね」

「それには同意するが……レイとんならうまくやるんじゃないか？」

……そう言えば、お前達の都市警の話はまだ聞いてなかったな」

ナルキは凄みを効かせた声を放ちテーブルから身を乗りだしラグナとリリオに迫った。

「ナツキ、ちゃんと話すから離れてくれ。コーヒーが溢れる」

「どうどう」

「すつ、すまない。……それとリリ、私は馬じゃないんだぞ」

ナルキを落ち着かせたラグナとリリオはアレルタ都市警の話 시작했다。
めた。

「以上で小隊についての説明を終わる」

「え、あつ、はい。わかりました？」

喫茶店でラグナ達が会話をしていた頃。

レイフォンは目の前に立つ金髪の少女から小隊についての説明を聞き終え絶賛混乱中だった。

銀髪の少女に連れてこられたのは一年校舎よりさらに奥に進んだ場所にある。年季の入った大きな建物で中を案内され。

ある一室に入ると金髪の少女に出迎えられると同時に小隊の説明を受けたのだ。

「自己紹介が遅れたな。わたしはニーナ・アントーク。第十七小隊の隊長を務めている」

レイフォンが今現在いる場所は、教室二つ分のスペースがあり、壁には様々な種類の武器が壁にかけられている。

そんな室内に、レイフォンを含めて五人の人物がいる。

一人、いましがたニーナ・アントークと名乗った金の少女。

二人、レイフォンをこの場に案内した銀の少女。

三人、気だるげに寝転がっている身長の高い男。

四人、機会油や触媒液で斑模様を作ったツナギを着た男だ。

（あれ？ さっきまで皆で楽しく話してたのになんでこんなことに……）

とうの五人目の人物、レイフォン・アルセイフは自分の現在の状況に頭が回らなくなっていた。

「わかったか？」

現実逃避をしていると、ニーナより声がかけられる。

「ええっと……それで、僕がここに呼ばれた理由はいつたい？」

「なに？」

レイフォンの言葉にニーナの片眉がピクツと震える。

「いえ、先輩方が都市のエリートだというのは、理解できました。でも、どうして……入学したばかりの一年生の僕がよばれるんですか？」

レイフォンはニーナの反応を感じとり、率直な理由を説明する。

「それは……」

ニーナはもう一度口を開こうとするがそれは叶わなかった。

——なぜなら。

「ぶはははははははははは」

そこら辺で寝ていた長身の男が大声で……しかも腹を抱えて笑い始めたからだ。

「シャーニッド先輩！」

どうやらこの、シャーニッドという男はニーナよりも上の学年の生徒らしい。

「げほっ、ぶふあ、はあ、はあ、いやー。こんなに笑ったの久しぶりだぜ」

シャーニッドは笑い疲れたのか目尻に溜まった涙を指ですくうと、「よっ、と」勢いをつけて起き上がった。

すこし、軽薄そうな雰囲気を出し、やや、たれた目が特徴の男だ。

「俺の名前はシャーニッド・エリプトン。見りゃわかるが武芸科四年だ。ここでは狙撃手を担当してる」

「どうも」

「で、だ。我らが隊長があんまりにも回りくどい言い方をするから、俺が代わりに言うぜ?」

「ぐっ」

ニーナはシャーニッドの言葉に歯を噛み締める。

「単刀直入に言うぞ、レイフォン・アルセイフ、おまえを呼んだのは……」

「……呼んだのは」

シャーニッドは一度言葉を切り、レイフォンは続きを促すと。

「おまえを我が十七小隊にスカウトするためだ」

「おいおい、横からそれはないぜ、ニーナ隊長?」

「ええい! 黙れシャーニッド、そんな勿体ぶった言い方をするから私が代わりに言うただけだ!」

あまりの展開にレイフォンは再び頭の処理が追い付かなくなった。

「は？」

「諦めたほうがいいよ、レイフォン君。君の活躍は皆見てたからね」

「えつと？」

混乱していたレイフォンに声をかけてきたのは緑と黒の斑模様のツナギを着た男だ。

「ああ、自己紹介が遅れたね。僕の名前はハーレイ・サットン。錬金科の三年だよ。十七小隊では錬金鋼のメンテナンスとかを担当してるんだ」

「先輩でしたか、レイフォン・アルセイフです。あと君はいりませんよ、呼び捨てで大丈夫です」

「うん、わかったよ。レイフォン」

レイフォンは比較的常識人そうなハーレイの出現にほっと胸を撫で下ろすが、そうはいかなかった。

「ハーレイの言う通りだぜ、おまえさんの實力は、入学式でもう証明されてんだ。だからこうやって、おまえさんをスカウトしてるってわけだ」

シャーニッドが会話に加わり、ハーレイの言葉の不足部分を補足し、そのままニーナに意味ありげな視線を向ける。

シャーニッドの視線を受けたニーナはレイフォンに告げる。

「本日をもって、レイフォン・アルセイフ。貴様を我が十七小隊の隊員に任命する。拒否は許されんぞ、これはすでに、生徒会長の承認を得た、正式な申し出だからな。だいたい、武芸科に在籍する者が、小隊在籍の榮譽を拒否するなど許さんからな」

（ああ、あの生徒会長の仕業だったのか……）

ニーナの拒否件をゆるさない言葉を聞き、レイフォンはこんな事態に追いやった張本人を恨んだ。

「今から、貴様には我が小隊のポジションが相応しいか、試験を行う」

ニーナはいつの間にか二本の基礎状態の錬金鋼を両手に掴み、右手に掴んだ錬金鋼をレイフォンに突きつけた。

「貴様も、好きな武器を取るがいい」

「……はい」

ニーナの雰囲気にもまれたレイフォンは部屋の壁にかけられた武器を手にとった。

（リーリン、僕、挫けそうだよ）

レイフォンは学園都市ツエルニ来てそうそう、心が挫けそうになった。

会長に吞まされた、奨学金ランクAの対価はレイフォンの想像以

上に重いものだ。

「ん？」

「どうしたの。ラグ？」

「いや……いま一瞬、レイフォンの叫びが聞こえたような」

「誰もいないけど？」

「気のせい……だよな？」

知り合つて間もないのに直感的にレイフォンのピンチを感じたラグナに、リリオは疑問の声をなげかけるも結局、ラグナの気のせいだという結論に至った。

哀れ、レイフォン。

「それにしても、今日一日だけで十分母さんに話せるネタができたな」

「そうだね。早くも四人、友達ができたしね」

ラグナとリリオは二人で帰宅の道を辿っている最中だった。

あのあと、ナルキにはアレルタの都市のあり方を説明し、都市警の働きについて一から説明してやったのだ。

自分たちが現役の警察だということは伏せてだが。

「ナツキに私たちが、現役で教えたらどうなったかな？」

「考えたくないな……しばらくは黙ってたほうがいいだろ」

「まさか、都市警の就労に誘われるなんてね」

「やっぱり、切っても切れない縁でもあるのか？」

あのときのナルキは少し怖かった、よっぽど都市警に対する関心が強かったのか、ラグナの話を一字一句メモするほどだ。

そんなナルキには悪いがラグナとリリオしばらくの間、学園都市の都市警に就労する気はない。

理由は単純に、一度。仕事から離れてみるというミリヤからの提案である。

仕事中毒といわんばかりに働いていた二人に、ミリヤは、『まず最初の一月は何もせずに過ごしてみたら？』と言われ、それを実践してみようかと考えているからだ。

「まあ、まずは最初の一月はゆっくり過ごしてみるか」

「体が鈍らないように、トレーニングだけは続けないとダメだよ？」

「わかってるて……おっ、ここだな」

二人の目の前にあるのは一件の五階建てのアパートだった。

「俺の部屋は一〇三号室でリオは……」

「ラゲの隣、一〇二号室だよ」

アレルタでは一つ屋根の下に住んでいた二人はだが。ここでは他の生徒の目もあるので、部屋は別々に借りてあるのだ。

「そうか……なんかあったら念威で呼べよ？」

「わかった。それじゃあ、お休みラゲ」

「お休み。リオ」

そうして、二人は各々の部屋へと入っていく。

明日から始まる。新しい生活に期待を持ちながら。

八話（後書き）

今回は一気に小隊、対抗戦まで跳びたいと思います。

それと、ラグナとリリオのトレーニング風景もです。

まだまだ未熟者の著者の二次創作ですが今後もよろしく願います。

感想やコメント随時お待ちしております。

九話（前書き）

第九話、完成しました。

ラグナとリリオの錬金鋼が軽く登場します。

ラグナとリリオの錬金鋼は著者の趣味で変わった得物になりました。

あと、著者は銃器については全然詳しくないため、ラグナの武器がおかしく感じるでしょうが許してください。

そしてすいません、対抗戦の寸前で止まりました。

それでも楽しんでいただければ幸いです。

九話

日もまだ完全に昇りきっていないツエルニの都市外縁部に二つの影がある。

「よし、さっそくはじめるか。っと、そのまえに……リオ、周囲に反応はあるか？」

「少し待ってて……」

影の正体は、上下黒の訓練着に着替えたラグナとリオだった。

リオはポニーテールにした髪を念威で輝かせ、近くに置いてある鞆から拳大の球体を取り出す。

「レストレーション」

球体の正体は、アレルタでリオが長年愛用してきた重晶鍊金鋼〔バーライトダイト〕だ。

本来、入学したばかりのラグナとリオは半年は鍊金鋼〔ダイト〕の所持は許されず、さらには鍊金鋼の私的利用（特に念威操者）は校則で禁じられている。

だが、二人はトレーニングを行う早朝のときだけ鍊金鋼を持ち歩いている。

復元言語を唱えられた重晶鍊金鋼は、基礎状態から元の姿を取り戻す。

拳大の球体だった重晶鍊金鋼は、リリオの両手に抱えられる程の大きさに変化した。

そのまま重晶鍊金鋼は、パズルのピースのようにバラバラになり、リリオの手には大きめのビー玉サイズの核だけを残す。

核から離れた念威端子は、周囲の探索を始める。

「……………ここら辺一帯に人、危険物の反応はないよ」

リリオが周囲の探索を始めて、三分も経たないうちに周囲の状態を伝える。

「おう、ありがとな。流石はリオだ」

「これくらい当然だよ」

ラグナの言葉にリリオは嬉しそうな笑顔を見せる。

「はじめよっか」

飛び立った念威端子を呼び戻し、鍊金鋼を基礎状態に戻す。

「まずはストレッチだな」

二人は身体をほぐすため、ストレッチを始める。

毎朝、日が昇る前に都市外縁部でトレーニングをするのが二人の日課だ。

元々、この日課はアレルタにいた頃から毎日欠かさず続けていたので、もはや趣味の領域に入っている程だ。

こうして、二人の一日が始まる。

二人が学園都市にやってきて早数週間。

レイフォンの小隊スカウト事件？ から様々な出来事があった。

どの出来事も、アレルタで仕事漬けだったラグナとリリオからしたら、新鮮なものばかりだ。

必死に授業を行う先輩の姿。

休み時間や昼休みに話しかけてくる同級生たち。

——その他多数の出来事。

特に昼食時に、ナルキたちがレイフォンを連れて誘いにくるのはどこかムズ痒くなる。

「ツエルニに来てから毎日、新鮮だね」

「どうしたいきなり？」

トレーニングの休憩中にリリオが感慨深そうに言う。

「だってさ……アレルタにいた頃は毎日。犯人を追いかけたり、現場を捜査したり、汚染獣襲撃の警戒任務に迎撃で、ラグ以外の人たちとこんな風に、過ごすなんて考えたことなかったもん」

「言われてみれば……そうだな」

ラグナは汗を拭きながら昔のことを思い出す。

データ泥棒の他都市の武芸者の逮捕。

誘拐グループの壊滅作戦。

違法酒の取り締まり。

下着泥棒の逮捕。

汚染獣の殲滅戦。

深刻な事件から軽い事件、重要な都市の防衛戦。

いま思い返してみると、仕事ばかりの毎日でプライベートでの年代との会話はまったく記憶になかった。

「確かにあの頃と比べると。新鮮に感じるな」

「でしょ？」

最初は学園都市で上手くやっていける自信がなかったが。

ナルキ、ミイフィ、メイシェン、レイフォンとの出会い。

ミリヤに話す思い出が沢山できた。

「卒業したら、母さんに話さないとな」

「大分気が早いけど、賛成だよ……あつ」

休憩の終わりを告げるアラームが鳴り響く。

「よし！ 休憩終わり。最後にアレをやるぞ」

「アレって……数が少ないけどいいの？」

「一発だけだよ、それに……足りなくなったらレイフォンに頼んで錬金課の先輩を紹介してもらうさ」

「……一発だけだからね？」

リリオは訓練着のポケットから弾丸を一つ取りだしラグナに手渡す。

ラグナはリリオに「ありがとな」というと錬金鋼を一つ取りだし。

「レストレーション」

錬金鋼を起動させる。

一瞬の発光のあとラグナの手に握られていたのは、一丁の拳銃だった。

黒鋼鍊金鋼（クロムダイト）で作られた拳銃は、黒鋼独特の光沢を放っている。

—— 黒鋼鍊金鋼（クロムダイト）は密度が高く、重さや、頑丈さが特徴だが、刃の伝導率が悪い欠点が見られる——

一見すれば普通の拳銃に見えるがラグナの持つ拳銃は大分趣味に走っている。

普通、武芸者が使う銃は自身の刃を弾丸にし発射したり、麻痺弾に瞬時に切り替えができるもので、大体は自動拳銃（オートマチック）の形をしている。

しかし、ラグナの持つ拳銃はなぜか回転式拳銃（リボルバー）型の銃だった。

銃口は大口徑、回転式の弾巢は三発分だけのスペースがあり、ハンマーコックも付いており、ラグナが握っているグリップには黒豹が彫られている。

勿論、普通の銃型鍊金鋼と同じで刃弾と実弾の使い分けはできるのだが、回転式にする理由がわからないだろう。

むしろ込めることのできる実弾が少ないだけで不便なものだ。

「しかし、久しぶりに使うな……コイツ」

「ラグ、急がないと準備する時間がなくなっちゃうよ」

「わかってるって」

今日はレイフォンが所属する十七小隊の試合の日であり、ナルキたちと応援にいく約束をしているのだ。

ラグナはリリオから受け取った弾丸を弾巢に一発だけ込め、ハンマーを上げる的に狙いをつける。

的は厚さ五十センチ、高さはリリオの身長のは半分はあろう金属の塊。

元々は廃棄置場に棄てられていた廃棄物で。恐らくは錬金科で作られた失敗作か何かだろう。

ラグナは狙いを付け引き金を引き絞っていく。

キリキリキリっと、弾巢が動く音がラグナの耳に聞こえる。

完全に引き金がかかるとハンマーコックが叩きつけられ、轟音と共に一発の弾丸が発射され金属の塊目掛けて飛んでいった。

「これは……いったい？」

先ほどまでラグナたちがいた外縁部に、銀髪の少女がやってきて、呆然と呟く。

銀髪の少女はレイフォンの所属する十七小隊の念威操者、フェリ・ロスである。

フェリは念威繰者以外の道を探すためにツエルニにやってきたのだが。

しかし実の兄でありツエルニの生徒会長である。カリアン・ロスの手により、レイフォンと同じく武芸科に転科され、十七小隊に半ば無理矢理入れられてしまう。

フェリは念威を使うのが嫌で今日の試合もサボろうかと思い、朝早く、外縁部にまでやってきたのだが。

眼前に広がる光景に目を奪われてしまった。

辺りに散らばるは大小様々な金属の欠片、それだけならまだ錬金科の生徒がここにゴミを勝手に棄てただけと思えただろう。

——金属片の中心に巨大なクレーターさえなければ。

（今日はもう、サボれませんね）

クレーターを見つけたフェリは嫌々ながら、錬金鋼を復元し、端子を飛ばす。

ここで見てみぬフリもできたが、ここに来るまでに建築科や錬金科の生徒に姿を見られているのである。

（余計な疑いをかけられるのはごめんです）

『こんな朝早くにどうしたんだい、フェリ？ 今日是对抗戦の日だろ』

「本当は連絡なんていたくありませんでしたが。一応報告します」

『報告?』

フェリの言葉にカリアンは疑問の声を出す。

「都市外縁部で巨大なクレーターを発見しただけです。錬金科の作業かと思いますが、第一発見者のわたしが疑われるのは迷惑なので」

『ふむ……わかった、そちらは調査を頼んでおこう。……それと、対抗戦には――』

「……わかってますよ」

これ以上余計なことを言われる前に、フェリは端子の接続を切った。

「誰だかわかりませんが、面倒なことを」

フェリは近くに転がっていた金属片を力一杯蹴り飛ばし、外縁部をあとにした。

「あゝ……もう!」

レイフォンは言葉にならない叫びをあげ洗面台に備え付けられている鏡に映る自身の顔を睨み付ける。

「本当にあの人は……」

どうしようにもならない苛立ちは先程まで話していた人物にたいしてだ。

カリアン・ロス。

同じ小隊のメンバーであるフェリ・ロスの実の兄。
彼がいまのレイフォンを苛立たせる原因。

しかし、レイフォンは逆らうことができない。
なぜなら、カリアンは知っているのだ。

レイフォンの本当の姿を。

槍殻都市グレンダンで優秀な武芸者十二人に与えられる称号。

天剣。

レイフォンはかつてグレンダンでこの天剣を授けられた。

しかし、レイフォンは過去にある罪を犯し、天剣を剥奪、さらには都市外追放を受けているのだ。

そのため、学園都市で武芸以外の道を探そうとやってきたのだが入学式の乱闘騒ぎでレイフォンの考えが狂ってしまう。

「あるとき、僕が動かなくても、あの衝剄が二人を止めてたのに」
思い出すのは、乱闘騒ぎの時のことだ。

レイフォンは知らないが、あの衝剄を放ったのはレイフォンの数少ない男友達であるラグナが放ったもので、レイフォンが手をださなくても、騒ぎは止められていたのだ。

（違う、いまはそんなことを考えている暇じゃない）

「いまは、目の前の問題をどうにかしないと」

洗面台から流れる流水で顔を一度濡らすと、レイフォンは十七小隊の控え室に戻るのだった。

その心に大きな疲れを残したまま。

「……………」

「メイちゃん どうしたの？」

恨めしげに、手に持ったバスケットを眺めているメイシェンにリオは声をかける。

「メイさんは、いったいどうしたんだナツキ？ ミイがまた悪戯でましたのか？」

「いや……今回はミイは関係ない。メイっちのはこと察してくれ」

「ひどっ！ ラグニヤンのあたしにたいする認識ってなんなのさ」

野戦グラウンドの観客席にたどり着いた二人は、なぜか不機嫌そうなメイシェンの姿を目撃し、ラグナは事情を知っていそうなナルキに聞いたのだ。

ついでに言えば、ラグナのミイフィにたいする印象は、よくメイシェンにちょっかいをだすお騒がせ娘だったりする。

「ミイのことは置いとくとして……」

「おくなー!」

ちなみに席順は、ナルキ、ミイフィ、メイシェンでその後ろの席にラグナとリリオは座っている。

「……もしかして、レイフォンに差し入れを持っていこうとしたの？」

「……うん」

リリオの問いにメイシェンは僅に顔を赤くし小さく頷く。

ラグナはバスケットを大事そうに抱え、顔を赤くするメイシェンを見て、ミイフィとナルキに小声で訪ねる。

（もしかしてメイさんて、レイフォンのことが……）

（多分そうだと思うよ。……ただ、レイとんてこついうの鈍そうなんだよね）

（それはあたしも思うな）

予想通りの答えが二人から帰ってきた。

とうのメイシェンはリリオに慰められ少しだが元気を取り戻している。

「なんて言っただ。 リオ？」

「試合が終わってから渡してあげればいいって。 激しく動いたあとなら美味しく食べてもらえるよって」

「なるほどな」

リリオの言葉にラグナは納得する。

「ラグナ、ちょっといいか？」

「どうした。 ナツキ」

「皆の分の飲み物と食べ物を買いにきたいんだが、あたし一人じゃ持ちきれないから、手伝ってくれないか？」

ナルキの誘いにラグナはグラウンドの時計を確認し、まだ試合開始まで余裕があることを確認し。

「了解だ、ナツキ手伝うぜ」

「すまないな」

「いいって、いいって。 リオ。 俺らが戻ってくるまで二人を頼んだ

ぞ」

ラグナはリリオに二人の面倒を頼む。それにミィフィが。

「おお、リリちゃん越しとは言え、ラグニャンに始めて心配されたよメイっち！ 明日はきつと雨だよ！」

「ミィちゃん、ラグナくんに失礼だよ」

「ミィ、他の客に迷惑をかけるなよ？」

「ナツキにクギ刺された！？」

「いつてらっしゃい二人とも」

リリオはミィフィの反応を無視して、ラグナとナルキを見送った。

「ところで、リリちゃん」

「なに？ ミィ」

ラグナとナルキが買い物に出て三人なったところ、ミィフィが話しかけてきた。

「ラグニャンとリリちゃんてどういう関係なの？」

「あつ、わたしも気になるかな」

「でしょ、でしょ！　メイっちも気になるでしょ！　でどうなのリリちゃん？」

ミイフィとメイシエンはどうやらいつも、二人で行動している、ラグナとリリオの関係が気になるらしい。

それにリリオは。

「大事な相棒であり家族かな？」

と即答した。

「へっ？」

「……？」

リリオの答えにミイフィとメイシエンはきよんとする。

リリオにとってラグナは昔自身の慰めてくれた大事な存在であり、都市警に入ってから、二人でコンビを組み、数々の修羅場を潜り抜けてきた間なのだ。

リリオにとってこの質問は、無粋なもの。だが初めての同年代の友達である、二人には答えを教える。

呆け気味のミイフィとメイシエンに、笑顔でリリオは人差し指を唇あて言う。

「いまの私に言えるのはここまで、それでいいかな？」

「「あつ……はい」」

思わず声を揃えて返事をしてしまつ、ミィフィとメイシェンだった。

その頃のラグナはナルキと共に売店に並んでいた。

「……多いな」

「あたしも、ここまでの人数とは思わなかった」

売店には長蛇の列ができており、二人は比較的人数が少ない場所に並んだのだが進みは遅かった。

「試合開始までまだ時間あるよな？」

「ああ、まだ大丈夫だ。それに十七小隊の試合は最後のほうだしな」

「なら、良かった」

そこで会話が途切れる。

（なんか気まずいな）

（むう、話が続かない）

二人揃って似たようなことを考えていた。

（……そういえば）

ナルキは、前にラグナに言たことを聞くことにした。

「ところで、この間の都市警の話は考えてくれたか？」

「都市警？ …… ああ、最初の日の話か」

乱闘騒ぎがあった日、ラグナとリリオはナルキから都市警で一緒に働かないかと誘われたのを思い出した。

「その件はまだ保留中だ」

「……そうか」

ナルキはラグナの言葉に少し肩を落とすが、ラグナは続けて言う。

「ただ、あと一ヶ月もしたら、働き口を探すかもしれないから。そのときは俺とリリオの紹介を頼むよ」

「ほっ、ほんとか！？ ラグナ！？」

「かもだから そこまで本気にするなよ？」

「いいや、そこまで聞ければ十分だ。しかし、リリはいいのか？ あいつはあいつでやりたいことがあるんじゃないのか？」

ナルキの言葉に、ラグナは苦笑いして言う。

「リオも了承ずみだよ。…… 大事な相棒だからな」

最後の部分は小さく呟いた。

「ん？ 最後はなんて言ったんだ。聞こえなかったぞ」

「なんでもない。……それより順番がきたぜ」

ラグナが前を指差すと店員が注文を待っていた。

「お客様、注文はいかがなさいますか？」

「すみません。いま注文します」

ナルキはラグナの言葉が気になるも、いまは買い物が先だと注文するのだった。

九話（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

ラグナの武器描写につきましては、ごめんなさいとしか言えませんが。

トレーニングの最後でたアレはラグナとリリオの鬼札です。

アレは原作一巻の話ではでません。

種明かしは必ずしますので読者の方々は、首をキリンのように長くしてまっていたけると幸いです。

前作と同じく駄文ですが、まえと違い。合計十話に達することができました。

今後もよろしく願っています。

感想やコメント、アドバイスなど随時お待ちしております。

「閑話01」（前書き）

今回は閑話になります。そして、短くてすいません。

今回の閑話は、ラグナとナルキが買い出しにいつている間のリリオの奇行もとい悪癖がメインとなります。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

「閑話01」

眼前に迫るは、恐れ、混乱、怒気を含んだ人の波。

おかしい……とメイシェン・トリンデンは思う。

ラグナという大きな男子と、そのラグナの腕に抱き抱えられていた。リリオという少女との邂逅を終え。

入学式が始まるのを幼馴染みである、ナルキ、ミイフィと待っていたのだが。

——気がつけば、人の波に吞まれ、二人と離ればなれになっ
てしまっ
た。

メイシェンは、勢いに押され床に倒れなんとか顔を上げるも、自分目掛けて迫る多数の足しか視界に入らない。

「メイっち！？ 逃げて！！」

「クソっ！？ メイ、すぐに助けて……」

幼馴染み二人の必死の声がメイシェンの耳に届くが。いまのメイシェンには言葉の意味はわからない。

ひたすら、助けを祈るしかない。

（誰か……助けて！）

固く眼をつむり、これからくるであろう痛みを耐えようとするが。

——痛みは襲ってこなかった。

「……なっ、なんで？」

メイシエンは先程まで自分に迫っていた生徒が、全員尻餅をついており、視線をその生徒の先に向ける。

視線の先には、騒ぎの原因の生徒を気絶させた、一人の少年。

メイシエンの初恋の人物になる。レイフォン・アルセイフの姿がそこにあった。

「あの日から、メイっちはレイとんにホの字なのだよりりちゃん」

「……おお、メイちゃん、それでレイフォンに惚れたんだね」

野戦グラウンド、観戦席。

ミイファイからメイシエンの話を聞いたリリオは感心したような声をだす。

リリオは本来、ラグナやミリヤ、マツク課長以外の人には、無愛想に会話することがほとんどだが、いまは年頃の女の子らしく、ツエルニで初めてできた友達の初恋話を聞いていた。

「……恥ずかしいよミイちゃん」

話題の人物になっているメイシエンはミィフィの話に顔を熟成したトマトの様に赤くする。

「メイちゃん可愛」

「わひゃう!？」

メイシエンはリリオに背後から抱きつかれ、驚きの声をあげる。

「……………」

「ひゃう!…………くっ、くすぐったいよりリちゃん」

リリオは無言のまま顔をメイシエンの背中に顔を埋グリグリと動かす。

その感触にメイシエンはさらに顔を赤くし、声をあげてしまう。

「リリちゃんて…………こんな子だっけ？」

リリオの奇行を見たミィフィは驚きの言葉を漏らす。

リリオ・クルール。

ツエルニの入学式の日ミィフィたちと友達になった、長い黒髪をポニーテールにした、念威繰者の少女。

リリオはいつもラグナと二人で行動しており、話をする際も、口数が少く、必要最低限の会話しかない。

落ち着きがあり、何気ない優しさをみせるリリオだが、今現在ミイフィの目に映るリリオは全然違った。

「くう、ふっ、ひん、やつ……り、リリちゃん……やめ……ひゃうん!？」

「……………」

メイシェンは、リリオにまだ抱きつかれており、顔を赤くし、官能的な声をあげている。

「…………（ゴクリ）」

思わず、生唾を飲み込んでしまった自分はおかしいだろうか？

（はっ！ ……いけないいけない、危うく別の道に目覚めるところだった）

しかしミイフィは気づく、自分達、特に目の前の二人に注がれる視線に。

（なんだろう？ この視線）

ミイフィは変な視線を感じたため、辺りを見回す。

「あっ……………」

危ない空気を醸し出す二人の少女たちは、周囲の観客、特に男子生徒に注目されている。

「って！ リリちゃんストップ！ ストッップ！ なんかもズイコ
とになってるから！？」

男子生徒の邪な視線に気づいたミイフィは慌て、いまだメイシェ
ンに抱きつく、リリオを引き剥がしにかかるのだった。

「どうしたんだ、ミイにメイさん？ 疲れきった顔して」

「反対にリリはやたらと艶々してるんだが……」

無事、売店から戻ってきたラグナとナルキは席に戻ってきた。

ミイフィとメイシェンが疲れた顔でぐったりとしており、对象的
にリリオの顔は元気に溢れ、やたらと艶々している。

「……ラグニヤン、あたし……もう、疲れたよ」

「俺たちがいない間になにがあっただよ！？」

ミイフィの燃え尽きたかのような声音に、ラグナは思わずツツコ
ミをいれてしまう。

「ラグ」

「どっ、どうしたリオ？」

「全力でメイちゃんにハグしちゃった」

「……………そういうことか」

リリオの言葉に、ラグナは納得する。

「なにを一人で納得してるんだ？ あたしにも詳しく説明しろ」

一人で納得したのが気に入らなかったのか、ナルキは眉をひそめる。

「リオは昔から、可愛いものが好きでな……」

「それがどうしたんだ？ 女の子なら、それは普通だと思うが」

「気に入ったものに全力で抱きつき、頬擦りしまくる癖があってもか？」

「それは、キツいな」

「多分だがメイさんの何かしらの行動に、リオの可愛いもののスイッチが入ったんだろうな」

リリオの悪癖をナルキに教えると、苦笑いしながらリリオを見る。

その表情は、どこか手のかかる妹をみる表情だ。

「まったくもって、その通りだよ、ラグニャン」

ようやく、復活したのかミィフィはナルキから受け取った飲み物を飲みながら、いままでの出来事を二人に説明する。

ミイフィが説明をしていくとラグナは頭を抱え、ナルキは顔を真っ赤にする。

「メイさん」

「はっ……はい」

ぐったりしているメイシエンはなんとかラグナに返事をする。

普段、レイフォン以外の男子に苦手意識を持っているメイシエンにしては珍しい反応だ。

（それほど、リリオの可愛い攻撃がキツかったのか）

心の中でラグナはため息をつき。メイシエンに謝罪の言葉をかける。

「うちのリオが迷惑かけたためいだな。——ほらリオもあやまれ」

「ごめんね、メイちゃん」

「だっ、だいつ、大丈夫だよ？ リリちゃん」

「……メイっち。——まったく説得力がないぞ」

大丈夫と言うメイシエンよっぽど恥ずかしかったのか、顔を赤くする。

「ああ、抱きつきたい」

「さすがに勘弁してやれリオ。メイさんが哀れだ」

赤くなるメイシェンを見てリリオに再びスイッチが入るが、流石に見かねたラグナがリリオの襟首を掴み、猫のように持ち上げる。

ラグナに掴みあげられたリリオは、小さく「ちえっ」と悔しそうに呟くのだった。

それと同時に野戦グラウンドに放送が鳴り響く。

『まもなく、第十六小隊と第十七小隊の試合が始まります。各小隊の隊員たちは各員所定の場所に集合してください。繰り返し――』

「おっ、そろそろみたいだな」

「ほら、メイっち、レイとんの出番だよ、早く元気になって」

「うっ、うん」

ラグナとミィフィがいうと、野戦グラウンド中央に二つの集団が集まる。

第十六小隊の隊員とレイフォンの所属する第十七小隊だ。

試合開始まであと僅かである。

「閑話01」（後書き）

閑話を読んでもいただきありがとうございます。

次話は小隊対抗戦の始まりから、試合の終わりまでにしたいと思っています。

かなり滅茶苦茶な展開といいますが、穴だらけのストーリーですがこれからも執筆を続けていきます。

次話の投稿は時間がかかるかもしれませんが許してください。

感想、コメント、アドバイス随時お待ちしております。

十話（前書き）

風邪を引いたりしたため、いつもより更新が遅れました。

クオリティ、相変わらず低くてすいません。

十話完成しました。

楽しんでいただけたら幸いです。

十話

「……はあ」

野戦グラウンドを囲む観客席は多くの生徒たちでひしめき、上空を飛び交う撮影機の姿にレイフォンはため息を漏らす。

レイフォンの視線の先には大型モニターが設置され、自分たちの姿が写り、観客はモニターを見てさらに気分を盛り上げる。

「いいねえ」

レイフォンのすぐ側にいたシャーニッドは上機嫌に撮影機に向かい手を振る。
——すると。

「シャーニッドせんぱい、がんばってくださいーい!」

「きゃあああ! シャーニッドさまあ」

一部の観客席より黄色い歓声があがり、シャーニッドの気分はさらにあがる。

「こういう雰囲気こそ、俺にはあってるな。こりゃあ普段の倍以上は実力が出せるな」

「そう願いたいな」

シャーニッドの軽薄な態度が気に入らないのか、ニーナは冷めた視線をシャーニッドに向け、そのままグラウンドを見回した。

「陣が作られている以外は、特に変化はないな……しかし、罠が仕掛けられている可能性があるな」

小隊対抗戦は基本、攻撃側、守備側に分けられ、それぞれ、勝利条件が変わる。

攻撃側は、相手チームのフラッグの破壊もしくは相手チームの全滅……行動不能が勝利条件であり。

守備側は自チームのフラッグの制限時間までの防衛もしくは相手チームの指揮官の撃破が勝利条件になる。

このルールは本番である武芸大会の勝利条件が敵司令部の占拠か都市の機関部の破壊にあるからだ。

フラッグはその代わりである。

なお学園都市間での武芸大会では、相手学園都市の校旗の会得が勝利条件でもある。

「フェリ、開始と同時に敵の位置の割り出しと罠の探知だ。同時にできるな?」

「さあ? どうでしょう?」

ニーナの問いにフェリは復元した杖の先で地面を掻きながら答える。

「……っ！」

フェリの余りのやる気のなさにニーナは表情を険しくする。

「……ははっ」

レイフォンは味方内の空気の悪さに、別の意味で力が抜けていく気がした。

『まもなく、第十六小隊と第十七小隊の試合が始まるうとしています！ いったいどちらの小隊が勝利を手にするのでしょうか！？』

司会役の運営委員のテンションの高い声がスピーカーを通してグラウンド全体に響く。

放送を聞いたニーナは指示をだす。

「開始が近い、各自、準備だ」

「了解です……レストレーション」

ニーナの指示を聞き、レイフォンは錬金鋼を復元する。

レイフォンの手に一振りの青い刀身をした剣が握られる。

青石錬金鋼（サファイアダイト）で作られた剣だ。

青石錬金鋼はバランス型の錬金鋼で、剋の伝導率が高いのが特徴である。

しかし、レイフォンの手に握られた青石鍊金鋼は虚しい輝きを出す。

本来、剄の伝導により、青く美しく輝くが今の青石鍊金鋼はただ太陽の光を照り返しているだけだった。

レイフォンはそんな青石鍊金鋼を見て、また気が重くなる。

「なんで、あるとき動いたのかな」

何度も思い出す、入学式の乱闘騒ぎ。

自分が止めなくても、謎の衝剄を放った人物により、収められていた騒ぎ。

「ああ、もう」

思わず声に出してしまう嘆きに近い声。

「どうした。緊張してるのか？」

「あつ……いえ、大丈夫です。ニーナ先輩」

「そうか？ ならいいんだが」

「すみません。心配をかけてしまつて」

「気にするな、それに私はこの小隊の隊長だ。部下に気を使うのは当然のことだ」

「はい」

返事を返したが、その声は開始のサイレンの音にかき消される。

「行くぞ、レイフォン」

手短に言ったニーナは飛び出し、レイフォンはその後ろを追いかけた。

生徒会長室でカリアンはモニターを眺める。

モニターには野戦グラウンドが写され、両陣に動きが起こる。

カリアンの視線は十七小隊の新人アタッカーである青い剣を持った、レイフォンに向けられていた。

「こいつが会長のお気にいりか？」

「そうだよ、ヴァンゼ武芸長」

突然かけられた声にカリアンは慌てることもなく、やってきた武芸科の生徒に顔を向ける。

ヴァンゼ・ハルデイ武芸長。

武芸科の委員会代表であるヴァンゼはカリアンの見ているモニターをみて眉をひそめる。

「動きが悪いな。劉の通りも悪い。こいつが本当に入学式で騒ぎを収めた奴なのか？」

「そうだよ？ ヴァンゼ武芸長」

「納得いかんな」

ヴァンゼは納得いかないという顔で執務机に上半身を預け、モニターを見る。

「こんな奴が武芸者だと？ けしからん奴だ。こいつを転科させた奴もな」

ヴァンゼの非難の視線を、カリアンは涼しい顔をして受け流した。

「彼の实力は本物だよ？ 彼が本気を出せばこのツエルニで勝てる人物はいないだろうね」

「そこまでいう奴なのか？」

「彼から見てみれば、ツエルニにいる武芸者は全員、卵から孵ったひよこだよ。……この対抗戦だって彼にとっては幼稚な遊びかもしれないな」

「言ってくれるな。俺たちはその幼稚な遊びで必死なんだぞ？」

「そう、ヴァンゼ武芸長の言う通りいくら遊びに見えても、都市を生かせなければならぬ必死さは同じだが。彼には、なかなかそれが伝わってくれないよ」

「お前の妹にも言えるがな」

「異論があるみたいだね、武芸長」

「あたりまえだ、生徒会長、なぜあんな問題児だらけの小隊の設立などゆるした？ 実力はあるが協調性のないシャーニッド・エリプトン、やる気をださない念威繰者、フェリ・ロス、極めつけは、いま現在試合で無様な姿を見させている——レイフォン・アルセイフ」

「……………」

ヴァンゼの視線の先のモニターではレイフォンとニーナが十六小隊の隊員と接敵するも、十六小隊の旋廻の速さを使った罠にかかり、分断された姿を写し出していた。

「おまえは、一人の有能な生徒の将来を潰す気か？」

「それは彼女……ニーナ・アントーク君の力次第だよ。ヴァンゼ武芸長」

「ふざけるな！」

カリアンの言葉にヴァンゼは執務机に拳を叩きつける。

「ヴァンゼ武芸長、君は——」

ヴァンゼの巨大な体格から放射される剋が生徒会室の空気を震わせ、カリアンが口を開こうとした瞬間、生徒会室のドアがノックされ、錬金科の男子生徒が入室してくる。

「会長、今朝のクレーターについての報告にあがりました」

「そうか、それはご苦労様では報告を頼むよ」

「クレーターだと？」

カリアンといましがた入室してきた錬金科の生徒の言葉にヴァンゼが再び眉をひそめる。

「そういえばヴァンゼ武芸長には報せていなかったね。今朝、フェリから連絡があつてね」

「どんな連絡だ」

「都市外縁部に粉々に砕かれた金属の塊と巨大なクレーターを発見したそうだ」

「そこにいる錬金科の生徒が実験かなにかをしたんじゃないのか？」

ヴァンゼは執務机の前にいる錬金科の生徒を指さしながらいう。

「今回ばかりは、ウチじゃありませんよ。ヴァンゼ武芸長」

「どうゆうことだい？」

報告にきた錬金科の生徒の言葉にカリアンはメガネを光らせる。

「今回発見された粉々になっていた金属の塊ですが、あれ……金庫用に作った超特殊合金みたいです」

「あれか……」

ヴァンゼは苦虫を噛み潰した表情を浮かべる。

超特殊合金は、大事な都市の情報、作物データを保存するための金庫を作る過程で造られたのはいいが、合金があまりにも堅すぎて加工ができなかった代物である。

ヴァンゼが全力の攻撃を加えるも、少ししか変化しなかった程の堅さを誇る忌々しい金属だ。

「破壊原因はわかったのかい？」

「はい……合金の破壊原因は内部からによる爆発です。どうやらその爆発の余波であのクレーターが出来たみたいですね」

「わかった、引き続き調査を頼むよ」

「わかりました会長。——ああ、忘れてました」

生徒会室を跡にしようとした生徒が何かを思い出したかのように振り向き、言った。

「クレーターの爆心地にですが、錬金鋼の欠片が残されていました」

「なに？」

ヴァンゼが反応する。

「それは本当かい？」

「ええ、錬金鋼の識別はまだできませんが、恐らくそれが爆発の原因でしょうね。何かわかり次第すぐに報告にきますよ。今度こそ失礼します」

錬金鋼の生徒は生徒会室を跡にした。

「ふむ、これは興味深いね。ヴァンゼ武芸長でも壊せなかった合金を破壊する武芸者か」

「ふん、言つてろ。それよりもさっきの続きだが――」

合金を壊せなかったヴァンゼが悔しそくに言い、話を戻そうとした瞬間、モニターから大歓声があがった。

「……これが彼の實力か」

「……信じられん」

モニターに視線を向けた二人、一人は再び納得し、一人は呆然とした表情を見せる。

モニターに写っていたのは、一瞬で十六小隊の隊員三人を戦闘不能に追いやった、レイフォン・アルセイフの姿だった。

「レイとん、すっごくいい！」

「ああ、あたしもビックリしたぞ」

「カッコいい……レイとん」

「……」

「……あいつ」

第十七小隊の一人であるレイフォン・アルセイフが一瞬で三人も
の隊員を倒した姿を見た三人は驚き感嘆の声をあげる。

しかし、ラグナとリリオは違った。

レイフォンの垣間見せた実力の一部は自分たちの想像を遥かに越
えていた。

レイフォンがいまの一瞬で見せた剋技は二つ。

外力系衝剋の変化

〔針剋〕

内力系活剋の変化

〔旋剋〕

この二つの剋技、ラグナは似たような剋技を使うのでわかる。
一つ一つの技の練度が。

「ほんと、何者なんだ？ レイフォン」

「調べてみる？」

「いや、いいさ。……あいつも色々抱え込んでるみたいだから」

さっきの動きを見せるまでのレイフォンの動きは酷かった。

劉の流れは乱れに乱れ、たった一人の武芸者の攻撃を転がって回避するなど、入学式でみせた力強さなどがまったく感じられなかったのだから。

しかし、いざ十七小隊の隊長が負けそうになったら入学式以上の動きを見せるレイフォン。

これは何か訳ありかと職業柄疑ってしまう。ラグナとリリオだ。

そんなことを考えていると、試合終了のブザーが鳴り響く。

「決着がついたみたいだな」

「あの軽い感じの人がフラッグを撃ち抜いたみたい」

モニターにはガッツポーズをし、観客に手を振るシャーニッドの姿があった。

「どれ、ちよくつらレイフォンの顔でも見てくるか」

「うん、メイちゃんも行こう」

「うっ、うん」

「あつたしも行くよ。沢山取材させて貰うんだから！」

「もちろん、あたしも行くぞ、レイフォンには聞きたいことが山程出来たからな」

「ミイとナツキは程ほどにな？」

ラグナの言葉を聞き、リリオはメイシエンを誘い、さらにナルキ、ミイフィの二人も参加し、大所帯でレイフォンの元へと向かうのだった。

「来るのが遅かったか」

控え室に向かったラグナたちだがそこには誰もいなかった。

「あれ？ 君たちどうしたのここは関係者以外立ち入り禁止のはずだけど？」

後ろからかけられた声に全員が振り返ると、ツナギをきた一人の男子が立っていた。

「勝手に入ってすいません、ところで先輩は十七小隊の方ですか？」

「そうだよ十七小隊の錬金鋼メカニックのハーレイ・サットンていうんだ」

「ラグナ・エデュライネス武芸科の一年です。ここにはレイフォンを訪ねて来たんですけど……」

「ああ、レイフォンなら保健室だよ？」

「保健室？」

ハーレイがいうには、控え室に着くと同時にレイフォンは気を失い、そのまま保健室に運ばれていったらしい。

『保健室に行けばまだ寝てると思うけど、いるはずだよ』

別れの挨拶をすませたラグナー一行はハーレイの言葉通りに、保健室に向かい、扉をあけると一人、ため息をつくレイフォンがベッドから起き上がっていた。

「おつかれさん、レイフォン」

「ラグナ。……それにナツキたちも」

「大丈夫、レイとん？」

「すごいじゃん、レイとん、一瞬で三人も倒しちゃってさ」

「たいした怪我がなくてよかったな。しかし、レイとんがあそこまで強いとは思わなかったぞ」

「おつかれさま」

一通り、労いの言葉をかけると、リリオはメイシェンの背後に回り、背中を押した。

「リッ、リリちゃん」

「メイちゃん、お弁当」

「お弁当？」

レイフォンの前に押し出されたメイシェンはリリオに早く弁当を渡せと催促される。

「あつ、えつと、試合の後だからお腹が空いてると思って」

「あつ、ありがとう、メイ」

「……うん」

お礼の言葉をもらったメイシェンは恥ずかしそうに俯く。

「リオ……ダメだからな」

「無理、我慢できない」

「そうか……ナツキ、ミイ後を頼む」

「えつ、あつ、ちよつと！ ラグニャン何で部屋からでるの！？
リリちゃんダメ〜！？」

ラグナは側で静かにメイシェンに抱きつこうとするリリオに注意するが聞き入れてもらえず、後のことをナルキたちに任せ、一人、廊下にでる。

「リリちゃん、抑えて、抑えて！！ ほら、ナツキも止めるの手伝

つて!？」

「リリ、落ち着け、流石にいまのメイっちを邪魔するわけには!？
ええい！ ラグナおまえも手伝え!？」

「おや、どこからかナツキの音がするな？」

ラグナは廊下で我関せずを通し、ミィフィとナルキは暴走するリ
リオを止めようと必死になっていた。

「どうなってるのこれ？」

「……聞かないで、レイとん」

片手にサンドイッチを持ち、目の前の光景に、啞然とするレイフ
オンに、リリオに抱きつかれたことを思い出したメイシェンは顔を
いま以上に赤くし、聞かないでと言っただった。

十話（後書き）

戦闘場面ほぼ皆無ですいません。

次話はラグ、リリとレイフォンの内緒話に、汚染獣襲来にいけるといいです。

基本、原作に添って執筆していますが、レイフォンや十七小队の人達の出番は少ないかもしれません。

著者のレベルが上がればいいんですが……。

—— そんなダメダメな小説（？）ですが、これからも読んでもらえると思います。

感想、コメント、アドバイスを随時お待ちしております。

P
S

＼（宣）＼ いつも読んでくれてありがとう、そして、ありがとう
（笑）

はい…… スカイハイ風でお別れです。

十一話（前書き）

十一話完成しました。

思ったよりも早くな目が覚めたので予定より早く投稿します。

今回も展開が意味不明なことになってしまいました。

それでも楽しんでいただければ幸いです。

十一話

リリオの暴走を止めた、ナルキ、ミイフィの二人は、リリオの首根っこを引きずりラグナがいるであろう廊下にでた。

「おつかれさん、二人とも」

廊下を出てすぐ近くに、二人を見捨て、一人安全地帯に避難したラグナがコーヒーを片手にナルキたちに労いの言葉をかける。

「ラグニャン、あたし疲れたよ」

「どの口が言うかこの……馬鹿ラグナが」

「ははっ、酷い言われようだ——ほれっ」

「うわっ」と

「これは？」

ラグナは苦笑いしながら二人によく冷えた缶を放り投げる。

ミイフィは缶を取りこぼしそうになるもなんとかキャッチし、ナルキは片手で受け取り、ラグナに聞く。

「二人に迷惑かけた、お詫びの品だ」

「ふん、なら今回はこれでチャラにしてやるか」

「もうなんでもいいよ……」

ナルキは意地悪な笑顔で、ミィフィは疲れきった表情でジュースを飲む。

「私には？」

「迷惑をかけた本人にあるわけないだろ？」

「……ケチ」

「ケチで結構だ」

リリオはリリオで自分にだけジュースがない不満を声にし、ラグナにぶつけるも、ラグナは涼しげな表情で受け流す。

「ところで……メイさんは？」

保健室から一向に出てこないメイシェンを心配し、ラグナは三人に聞くと。

「メイっちは、レイとんと大事なお話だよラグニャン」

「いまは、二人きりにしてやるのがあたしたちの仕事だ……」

「メイちゃんは頑張ってるよ？」

「あゝなるほどな……」

三人の言葉を聞いたラグナは瞬時に理解する。

今現在、メイシェンはレイフォンといい雰囲気を作っているのだと。

「二人はどうするんだ？　メイさんが出てくるのを待つのか？」

「いや、あたしもミイもバイトの時間が近いから、そろそろ仕事場に向かうぞ」

「ラグニャンたちはどうするの？　家に帰るの？」

ミイフィの問いに、リリオが素早く答える。

「レイフォンにちょっとだけ、用事があるから。メイちゃんが出てくるの待ってる」

「そうなのラグニャン？」

「あつ、ああ、そうなんだ。ちょっとレイフォンに聞きたいことがあつてな……それより二人とも、時間が近いなら急いだほうがいいんじゃない……」

「本当だ！　ナツキ急がないと遅刻しちゃうよ」

「くっ、もうこんな時間か……二人とも、メイっちとレイとんのことを頼んだぞ！」

「任せて」

「二人とも、バイト頑張れよ」

リリオの返答に、ラグナは若干慌てながらも対処し、時間を告げると二人とも慌てて、その場を後にし、廊下に残されたのはラグナとリリオの二人だけだった。

「リオ、やっぱり聞くのか？」

「うん……レイフォンには悪いと思うけど、あれだけ無様な姿を見せられたら、事情を聞きたくなるよ」

思い出されるのは今日の対抗試合のレイフォンの動き。

乱闘騒ぎのときはまったく違うレイフォンの剄の流れ、反撃の気配すら見せずひたすら地面を転がり続けた弱々しい姿。

対照的に、十七小隊の隊長が敗れそうになった瞬間に一瞬だけ、見せたラグナよりも練度の高い剄技に剄の総量。

リリオじゃなくても気になるものだ。

「レイフォンのちぐはぐした行動には何かしらの裏がある……ってか？」

「……うん」

「はあ……レイフォンが素直に話してくれるとは思わないが、聞くだけは聞いてみるか」

ラグナはため息をつくも、リリオの意見に賛同し、レイフォンに聞けるだけは聞いてみるかと考える。

「あれ？ リリちゃんにラグナくん、ナツキたちは？」

気づかぬうちに、保健室のドアが開いており、レイフォンと話をしていた筈のメイシエンが姿を表していた。

「……………」

メイシエンが保健室より、退室したあとレイフォンは一人考えていた。

メイシエンには所々をかいつまんで過去に自分が何の為に武芸をやってきたのかを説明し、いまは武芸以外の道を探していることも教えた。

それにメイシエンはきつと、やりたいことが見つかると言ってくれた。

更に、レイフォンに事情があるかもしれない……ただ、対抗試合でわざと負けるつもりだったのに、途中から本気を出すのはカッコ悪いと思ってしまったとも言われた。

「かつこよかった……か」

保健室を退室する前にメイシエンに言われた最後の言葉。

『……入学式の時のレイ、とんは、本当にかつこよかったです。わたしはあの時みたいなレイとんが見てみたいです』

恥ずかしがりで人見知りの激しいメイシェンが言ってくれた言葉。

レイフォンはなにも言えず、ただ首を振るだけしかできなかった。

「はあっ……………」

本日、何度目になるかもわからないため息をつく。

すると、再び保健室のドアが開く音がし、レイフォンが顔をそちらに向けて二人の人物が入室してきた。

「おっ、悩んでるなレイフォン」

「これが…………青春？」

「いや、なんか違うだろ」

「ラグナにリリオか…………どうしたの？」

やってきたのは、入学式のあった日にナルキたちに紹介された、レイフォンと同じ武芸科の生徒で、ラグナにいたっては数少ない男友達である。

「レイフォンにちょっと、聞きたいことがあってな」
「聞きたいことって？」

ラグナの言葉にレイフォンは疑問を浮かべる。

「……」

ラグナは無言のまま、リリオに視線を送り、リリオが静かに落ち着いた声でレイフォンに聞く。

「試合のときのアレ——全力じゃないでしょ？」

「……僕の全力はアレで限界だよ」

リリオの言葉にレイフォンは背筋に嫌な汗をかく。
今日の対抗試合、一瞬だが確かに本気を出した。

この学園都市の未熟な武芸者からみてみれば、試合の時の動きの全てがレイフォンの全力だと思うだろう。

だが、このリリオという念威繰者は確かに言った。

『全力じゃないでしょ？』

グレンダンで天剣に選ばれる程のレイフォンの実力が見抜かれた。

レイフォンは、リリオの隣にいるラグナに助けを求めようと視線を向けた。

「！？」

——瞬間、レイフォンは頭を右に傾けた。

「……ラグナ、どうということかな？」

レイフォンの頭が先ほどまでであった場所の先に、小さな焦げ跡があった。

「悪いなレイフォン、ちょっと試させてもらった」

レイフォンの視線の先には右手の親指を上げ人差し指をレイフォンに向けたラグナの姿があった。

「……試す？」

レイフォンは眉をひそめながらラグナを睨み付ける。

友達だと思っていた人間にいきなり攻撃されれば当たり前前の反応である。

「レイフォンの実力がどれ程か知リたかつたんでな。指弾を六割程の力で撃つたんだが……まさか本当に避けられるとはな」

「あつ……」

急速に頭が上がった、血が下りていく感覚がわかりレイフォンは思わず間抜けな声を上げてしまう。

実力のことを誤魔化すつもりだったのに、まんまとハメられたのだ。

「またやつちやつたよ」

「しかし、自信なくすよ。二度目だからな、指弾が不発に終わるの」

「二度目？」

「そつ、二度目」

壁についた焦げ跡を見てレイフオンは頭を捻る。

（これくらいの焦げ跡、最近みたような）

あつ。
.....

思い出すのは入学式の乱闘騒ぎ。

レイフオンが止めにはいらなくても、騒ぎの犯人を止めいていた
であろう衝剋。

講堂の壁につけられた小さな二つの焦げ跡。

ラグナの言う、二度目のハズレ。

レイフオンの頭の中で全ての歯車が噛み合う。

「あの衝剋って、ラグナだったの！？」

「そつだよ？ 気づいてなかったの？」

「なんで、リオが答えてるんだ？」

「.....てへっ」

「意味がわからんぞ」

「ラグナ！ 僕の質問に答えてよ！」

「いいよ」

「だからなんで、リオが答えようとする」

ラグナとレイフォンの会話中にリリオが割り込んできて、混沌となったのは言うまでもない。

混沌とした状況からなんとか復帰した三人は、話せる範囲内の事情を説明しあっていた。

——結果。

「ほんつとくに、申し訳ない」

「ごめんなさい」

「頭をあげてよ二人とも！？ 結果的には僕が乱入したようなものなんだし」

なぜかレイフォンに向かって頭を下げるラグナとリリオの姿だった。

レイフォンが話した事情はこうだった。

？グレンダンでちょっとゴタゴタを起こし、これを気に学園都市で武芸以外の道を探すことを決意。

？無事、学園都市ツエルニの試験に合格し、入学式にやって来ると、丁度乱闘騒ぎの最中。

？ラグナが指弾を放ったことに気づかなかったレイフォンはなぜか騒ぎの原因の二人を気絶させ、騒ぎを止めてしまう。

？このことが生徒会長の耳に入り、『君は素晴らしい実力をもっているね。奨学金ランクをAにしてあげるから武芸科に転科しないか？』と生徒会長に言われ、一般教養科から武芸科に転科、そして小隊にほぼ強制的に入隊、そして現在にいたる。

話を聞く限りではラグナたちに責任はなく、レイフォンの自業自得にしか思えないが、二人は違った。

「すまない、俺がもう少し早くにあの馬鹿二人を始末してれば、レイフォンは平穩に学園生活を過ごせたのに」

「私も、もっと早く、あの屑二人を見つけていれば、念威爆雷の一発二発を叩き込んでやったのに……」

「いやいや、二人とも物騒なことになってるからね？」

ラグナとリリオの反応にレイフォンは苦笑いするしかなかった。

「ところで、ラグナは何者なの？ 自分で言うのもなんだけど、僕が気を抜いてたとはいえ、衝刺を放つ寸前まで攻撃の気配を悟らせ

ないのは並の実力じゃないよ?」

「……………レイフォンが事情を話してくれたんだ、俺たちも正体だけ教えとくか」

「賛成」

レイフォンの何者かと言う言葉にラグナは答える。

「俺はアレルタ都市警察所属のラグナ・エデュライネス警部補」

「同じく、アレルタ都市警察所属、リリオ・クルール警部」

「アレルタ都市警の武芸者が……………どうりで他の生徒とは雰囲気が違うんだね」

「なんだ、気づいてたのか?」

「なんとなく……………だけどね」

レイフォンは二人の足の運びやラグナの剽の流れてただ者ではないことを感じていたが、先程の攻撃で、ニーナより数段上の実力の持ち主だと気づいた。

「ラグナたちは、どうして学園都市に? 僕と同じ年でアレルタ都市警に勤務してたことは、学園都市に必要はなかったんじゃないの……………それとも犯罪者がこの都市に?」

アレルタ都市警に勤務してたということは既に仕事に就き、独立して働いていたということ。

レイフオンはそんな二人がなぜ学園都市に来たのかが気になった。

もしかすると、犯罪者がこの都市に出現すると予想し、やって来たのかと思ってしまう。

「ああそれはな——」

「友達づくり」

「いちいち、俺の台詞とるなよ」

「……つい」

「ええ〜」

レイフオンの予想を大きく裏切り、二人の理由は子供ぽかった。

そんなレイフオンの反応を見越してか、ラグナは続ける。

「簡単に言っと、毎日毎日、仕事漬けの俺たちは同年代の友達がまったくいない——」

「だから、いままでの実績のご褒美と有給を使って、学園都市で思いでと友達を沢山作ってこいって」

「リオ、今日はやたらと俺の台詞とるな」

「へえー、そうなんだ」

レイフオンの思考回路は別の意味でいっぱいになった。

最初、ラグナとリリオは真剣な表情でレイフオンの実力を問い詰め、さらにはいきなり攻撃を仕掛けてくるほどである。

しかし、リリオが途中で会話に参加してから、いままでの真面目な雰囲気なくなり、レイフオンはメイシェンにしたのと同じ説明を二人にすると、ラグナとリリオは自分たちの正体を明かしてくれた。

レイフオンは内心申し訳ない気持ちだった。

ラグナとリリオは自分たちの正体を明かしてくれたのに、自分はグレンダンでやったことを話すことができてないからだ。

そんな事を考えていると、ラグナから声をかけられる。

「さてと……俺たちは先に帰るけどレイフオンはどうする？」

「えっ、あ、僕はもう少し休んだら帰るよ」

「……そうか、リオ。帰るぞ」

「わかった」

二人は自分の荷物を持ち、帰ろうとするがラグナは突然立ち止まる。

「忘れてた。レイフオン受けとれ」

「あつ、ありがとう」

ラグナより渡されたのは一本の管ジュースだ。

「じゃあな、レイフォン」

「また明日ね」

「うん、二人ともまた明日」

別れの挨拶をすませると二人は保健室から退室していった。

これで保健室に残ったのはまたレイフォン一人になり、レイフォンはラグナから渡された管ジュースを弄っていると底の部分に違和感を感じジュースをひっくり返してみる。

「手紙？ ラグナの悪戯かな？」

底には小さく折り置まれた手紙が付けられており、レイフォンはその手紙を開いてみた。

「ははっ、すごいや二人とも」

レイフォンは小さく笑うことしかできなかった。

『まだ言えないことがあるだろうが気にするな。なにかあったら、俺かりりオに相談しろ。多少は力になってやる』

『落としものから、猫探し探し物なら任せといて。b y りりオ』

正直、リリオの手紙はただのアピールだが、レイフォンは多少肩の力を抜くことができた。

帰り道、ラグナとリリオは話をしていた。

「レイフォンの奴、まだなにか隠してたな」

「しかたないよ、私たちが出会ってまだ間もないんだから」

「それもそうだな。あいつから話してくれるのを待つか」

二人は最初からレイフォンの会話に違和感を感じていた。

取り調べで犯人が嘘をつくときの雰囲気とレイフォンの雰囲気が似ていたというのもある。

「レイフォンの話はこれで終わりだ。……リオ、今日は暴走しまくりだったな」

「メイちゃんが可愛すぎて、思わずね」

「明日からは気をつけろよ。人目ってのがあるんだからな」

「……保証はできないよラグ」

「いや、そんなことや顔で言われてもな……」

二人は馬鹿な会話をしながら帰宅する。

しかし、これから数時間後、学園都市ツエルニが危険な状態に陥ることとなる。

十一話（後書き）

すいません。

汚染獣襲撃までいけませんでした。

著者の力不足の為、ニーナたちとの本格的な関わり合いは原作二巻の話になりそうです。

それと、リリオはラグナと二人きりのときは真面目な女の子なのですが、第三者がいると、なぜか不思議なボケキャラ（？）になっています。

著者もビックリです。（笑）

次話こそは、戦闘場面を書けると思います。

楽しみにしてもらえると嬉しいです。

ラグナの他の錬金鋼も登場する予定です。

感想、コメント、アドバイスなど随時お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6472w/>

鋼殻のレギオス【黒の秩序】

2011年10月11日05時54分発行